明日香村発掘調査報告会
2018

檜前大田遺跡（2018年撮影）

平成３１年3月17日（日）　午後1時～

明日香村中央公民館　ホール

明日香村教育委員会

プログラム

13：00　あいさつ　　明日香村教育委員会　教育長　田中　祐二

13：05　調査報告

「近年の檜隈地域の調査」　長谷川　透
（明日香村教育委員会　文化財課　主任技師）

13：55　「史跡・名勝　飛鳥京跡苑池の発掘調査とその成果」　鈴木　一議
（奈良県立橿原考古学研究所　調査課　主任研究員）

14：45　休　憩

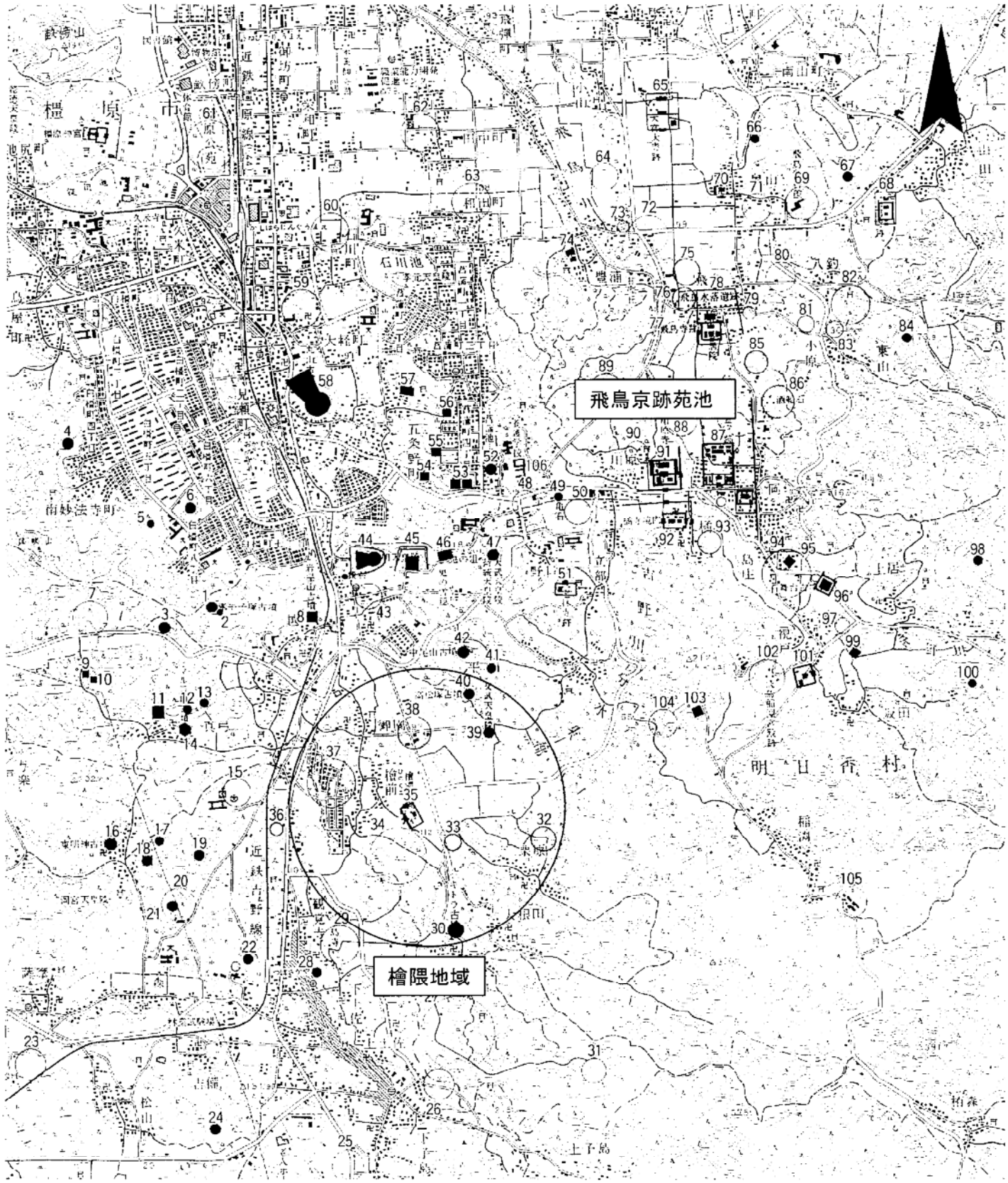
15：00　記念講演

「飛鳥の苑池のはじまり」　木下　正史先生
（明日香村文化財顧問・東京学芸大学名誉教授）

16：00　終演予定

【奈良交通　中央公民館バス停「赤かめ」周遊バス時刻表】

橿原神宮駅前東口	方面	14：51	15：51	16：51
飛　鳥　駅	方面	15：07	16：07	17：07



1. 牽牛子塚古墳　2. 越塚御門古墳　3. 真弓鑵子塚古墳　4. 小谷古墳　5. 益田岩船　6. 沼山古墳　7. 与楽古墳群　8. 岩屋山古墳　9. スズミ１号墳
10. スズミ２号墳　11. カヅマヤマ古墳　12. 真弓ミヅツ古墳　13. 真弓テラノマエ古墳　14. マルコ山古墳　15. 佐田遺跡群　16. 束明神古墳　17. 佐田２号墳
18. 佐田１号墳　19. 出口山古墳　20. 森カシタニ遺跡　21. 森カシタニ塚古墳　22. 向山１号墳　23. 薩摩遺跡　24. 松山呑谷古墳　25. 清水谷古墳
26. ホラント遺跡　27. 阿部山遺跡群　28. 稲村山古墳　29. 観覚寺遺跡　30. キトラ古墳　31. 阿部山廃寺　32. 呉原寺跡　33. 檜隈門田遺跡　34. 檜前大田遺跡
35. 檜隈寺跡　36. 坂ノ山古墳群　37. 桧前上山遺跡　38. 御園チシアイ遺跡・御園アリイ遺跡　39. 塚穴古墳　40. 高松塚古墳　41. 火振山古墳　42. 中尾山古墳
43. 平田キタガワ古墳　44. 梅山古墳　45. カナヅカ古墳　46. 鬼の俎・雪隠古墳　47. 野口王墓古墳　48. 川原下ノ茶屋遺跡　49. 亀石　50. 西橘遺跡　51. 定林寺跡
52. 菖蒲池古墳　53. 五条野宮ヶ原１号墳・２号墳　54. 五条野向イ古墳　55. 五条野城脇古墳　56. 五条野内垣内古墳　57. 植山古墳　58. 五条野丸山古墳
59. 軽寺跡　60. 石川精舎　61. 橿原遺跡　62. 田中廃寺　63. 和田廃寺　64. 雷丘北方遺跡　65. 大官大寺跡　66. カセヤ塚古墳　67. 庚申塚古墳　68. 山田寺跡
69. 上の井手遺跡　70. 奥山久米寺跡　71. 奥山リウゲ遺跡　72. 雷丘東方遺跡　73. 雷丘　74. 豊浦寺跡　75. 石神遺跡　76. 飛鳥水落遺跡　77. 飛鳥寺西方遺跡
78. 飛鳥寺跡　79. 飛鳥東垣内遺跡　80. 竹田遺跡　81. 小原シウロ遺跡　82. 八釣・東山古墳群　83. 東山マキド遺跡　84. 金鳥塚古墳　85. 飛鳥池工房遺跡
86. 酒船石遺跡　87. 飛鳥京跡　88. 飛鳥京跡苑池　89. 甘樫丘東麓遺跡　90. 川原寺裏山遺跡　91. 川原寺跡　92. 橘寺跡　93. 東橘遺跡　94. 島庄遺跡
95. 石舞台１～４号墳　96. 石舞台古墳　97. 馬場頭古墳群　98. 打上古墳　99. 都塚古墳　100. 戒成組田古墳　101. 坂田寺跡　102. 飛鳥稲淵宮殿跡
103. 塚本古墳　104. 朝風廃寺　105稲淵ムカンダ遺跡　88. 小山田遺跡(小山田古墳)

飛鳥地域周辺遺跡分布図

近年の檜隈地域の調査

長谷川　透
（明日香村教育委員会）

１．はじめに

檜隈地域の研究

・檜隈野に集住した渡来人たち

・‘檜隈’の範囲

㊤ 北は五条野丸山古墳付近、南は高取町清水谷、東は南淵付近、西は真弓丘陵付近

㊦ 北は欽明陵（梅山古墳）、南はキトラ古墳付近、東は定林寺付近、西は下ツ道・紀路

・檜隈は渡来系氏族東漢氏の本拠地

・斜行する特殊条里「檜前条・呉原条」

２．檜隈の遺跡

①古代寺院･･･檜隈寺跡、呉原寺跡、立部寺跡

②居　　宅･･･檜前大田遺跡、檜前上山遺跡、檜前門田遺跡、御園アリイ・チシヤイ遺跡

③古　　墳･･･高松塚古墳、キトラ古墳

④陵　　墓･･･檜隈坂合陵（梅山古墳）、坂合陵陪冢（カナヅカ・経塚・鬼の俎・雪隠）、檜隈墓（古備姫王墓）、檜隈大内陵（野口王墓古墳）檜隈安古岡上陵（栗原塚穴古墳）中尾山古墳（文武陵）

①古代寺院

・檜隈寺跡

伽藍配置・・・西の正門（西門）から延びる回廊が北に講堂、南に金堂に取り付く。
西門の正面、伽藍中央東寄りに塔を配置。特異な伽藍配置。

伽藍主軸・・・北で西に２３度振る。北西に伸びる尾根筋に沿って南北に長い

造営時期・・・７世紀後半　西門・金堂　檜隈寺式軒瓦

・・・７世紀末　　講堂・塔　　藤原宮式軒瓦　講堂は瓦積基壇

出土遺物・・・輻線文軒瓦　穴太廃寺などの近江地域の古代寺院で顕著

・・・火焔文軒丸瓦　前身寺院の存在

・・・文字瓦「吴」

・檜隈寺周辺（檜隈寺北方）

・・・掘立柱建物、寺院工房、竪穴建物附属Ｌ字形カマド

・・・金銅製飛天像・小金銅仏片、格子タタキ軒丸瓦

・・・寺院の造成や遺構の展開が東漢氏の動向と対応

・呉原寺跡・・・火焔文軒瓦など瓦や礎石を確認　伽藍・堂塔の詳細不明

・立部寺跡・・・塔、推定講堂、回廊跡　伽藍配置不明　日本最古級の塑像頭部出土

②居宅

・檜前大田遺跡・・・５世紀　韓式系土器

・・・７世紀前半　大壁建物

・・・７世紀後半以降　掘立柱建物群（庇付建物、間仕切建物）

・檜前上山遺跡・・・７世紀後半　掘立柱建物（総柱有り）・塀・土塁状遺構、官衙的

・檜前門田遺跡・・・７世紀か　掘立柱建物・区画塀（50m四方か）
・御園アリイ遺跡・・・・交差点の北東　７世紀中頃から末　大型掘立柱建物群４時期
・御園チシヤイ遺跡・・・交差点の南東　７世紀後半　掘立柱建物
③古墳
・キトラ古墳、高松塚古墳・・・７世紀末～８世紀初頭　壁画古墳
④陵墓・・・６世紀後半から７世紀末に檜隈盆地の北縁部に造営

４．檜隈とその周辺における渡来系遺跡の動向

４世紀末頃～　初期の渡来人　渡来系遺構（大壁建物、Ｌ字形カマド）出現［市尾カンデ遺跡］
５世紀後半頃　渡来文化の流入、渡来系土器の出土［檜前大田遺跡、阿部山遺跡群］
渡来系遺構の展開　［森ヲチヲサ遺跡］
渡来系古墳の出現　金銅製釵子･ミニチュア農工具出土［坂ノ山４号墳］
６世紀　渡来系古墳の展開［稲村山古墳・藤井イノヲク古墳群・真弓鑵子塚古墳］
墓域の集約　与楽古墳群の形成　穹窿状石室　ミニチュア炊飯具・銀釧出土
７世紀前半　寺院の前身遺構の創建［檜隈寺下層？・檜隈寺周辺］
檜隈寺周辺での渡来系遺構・遺物の展開　［檜隈寺周辺・檜前大田遺跡］
石室構造の変遷　穹窿状から横口式へ　［与楽鑵子塚→カンジョ→白壁塚］
７世紀後半　檜隈寺の造営開始　［檜隈寺西門・金堂］
呉原寺の造営？　［呉原寺］
檜隈寺周辺での居住域の展開　［檜前大田遺跡］
７世紀末　檜隈寺の完成　［檜隈寺講堂・塔］
居住域の広がり　［檜前上山遺跡・檜前門田遺跡・御園アリイ・チシヤイ遺跡］
壁画古墳の築造　［キトラ古墳・高松塚古墳］

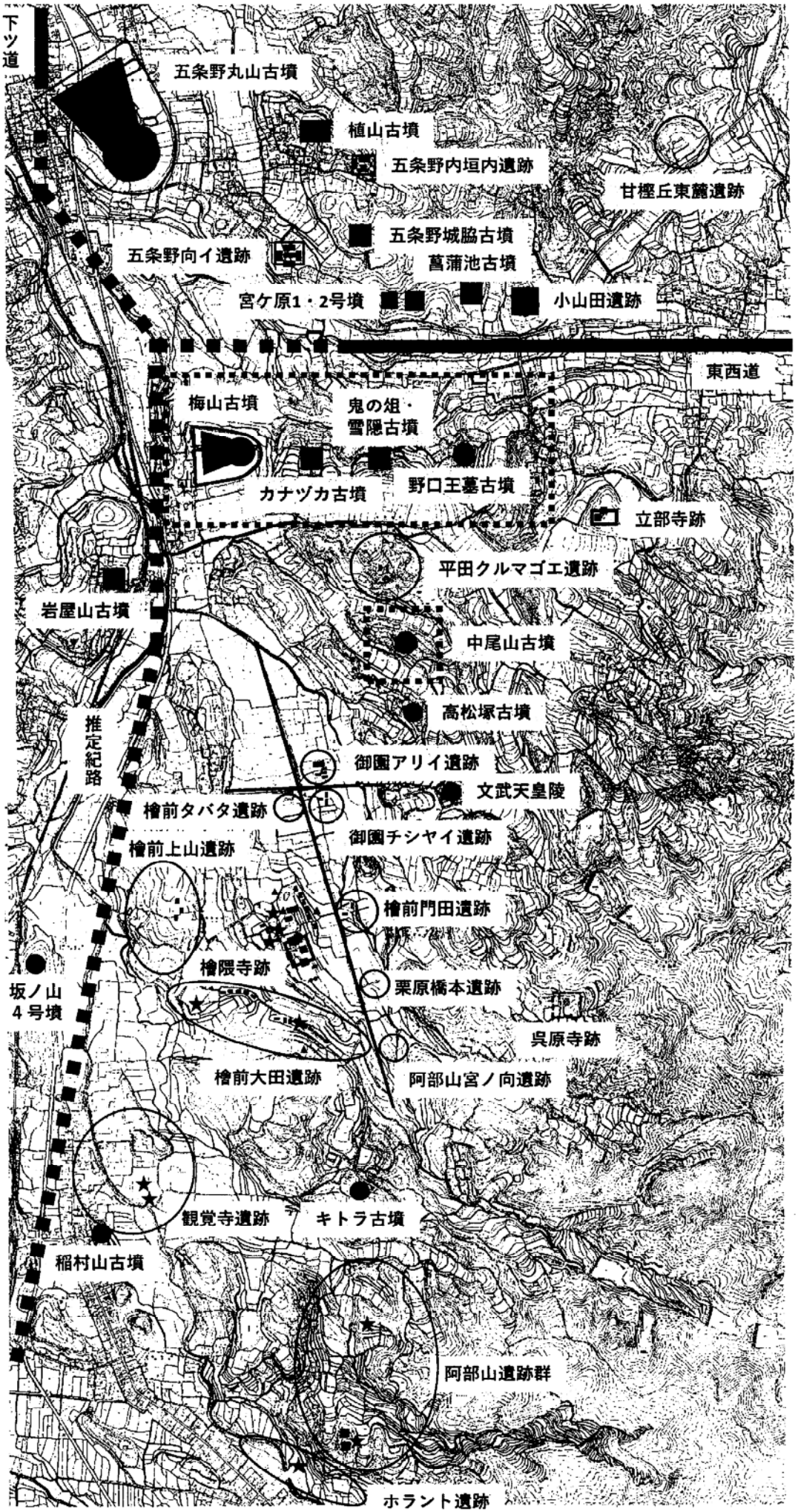
５．渡来系氏族 東漢氏の動向

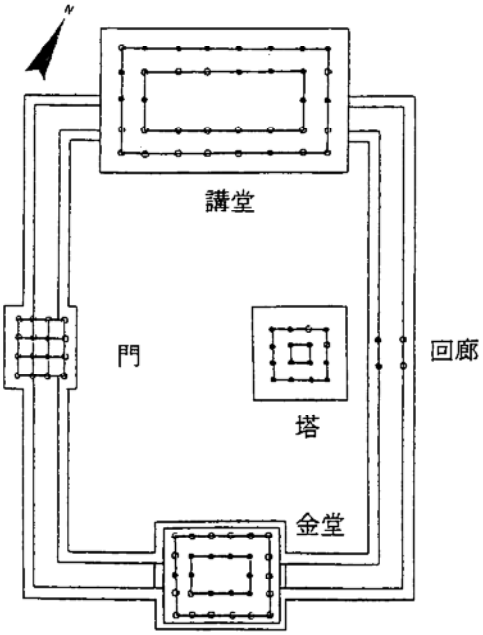
・東漢氏の盛衰・・・乙巳の変、壬申の乱前後、天皇から七つの罪で叱責
・渡来系文物から見る東漢氏の出自
・新来の渡来人の受け入れ

６．檜隈の地域性と渡来文化

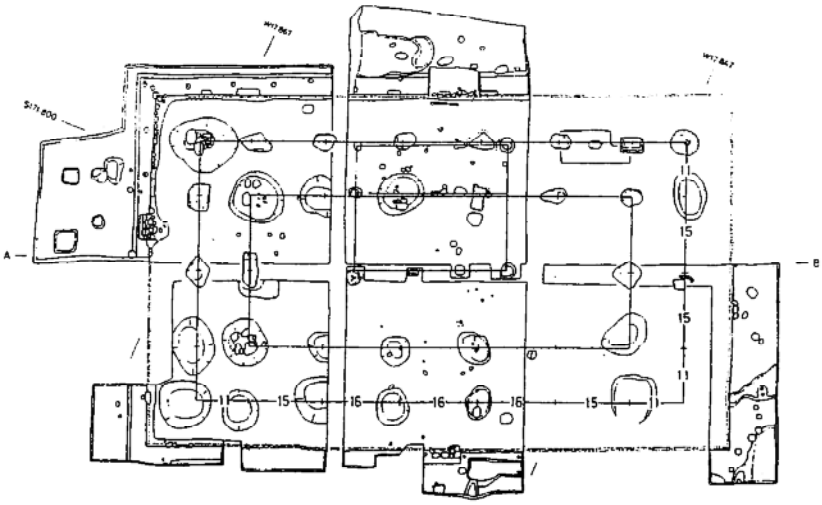
・檜隈寺周辺は７世紀後半以降に土地利用が活発となる
・７世紀後半以降、古墳と寺院以外では渡来系要素がみえなくなる

７．おわりに

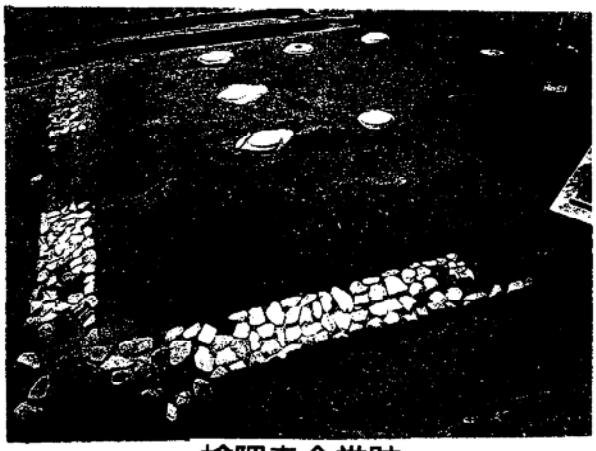

下ツ道
五条野丸山古墳
植山古墳
五条野内垣内遺跡
甘樫丘東麓遺跡
五条野城脇古墳
五条野向イ遺跡
菖蒲池古墳
宮ケ原1・2号墳
小山田遺跡
東西道
梅山古墳
鬼の俎・雪隠古墳
カナヅカ古墳
野口王墓古墳
立部寺跡
平田クルマゴエ遺跡
岩屋山古墳
中尾山古墳
高松塚古墳
推定紀路
御園アリイ遺跡
文武天皇陵
檜前タバタ遺跡
御園チシヤイ遺跡
檜前上山遺跡
檜前門田遺跡
檜隈寺跡
栗原橋本遺跡
坂ノ山4号墳
呉原寺跡
檜前大田遺跡
阿部山宮ノ向遺跡
観覚寺遺跡
キトラ古墳
稲村山古墳
阿部山遺跡群
ホラント遺跡
檜隈地域遺跡分布図



檜隈寺伽藍配置図



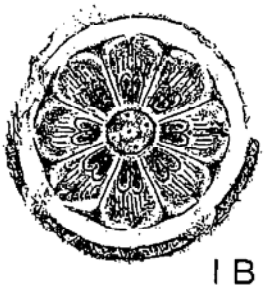
檜隈寺講堂跡



檜隈寺金堂跡

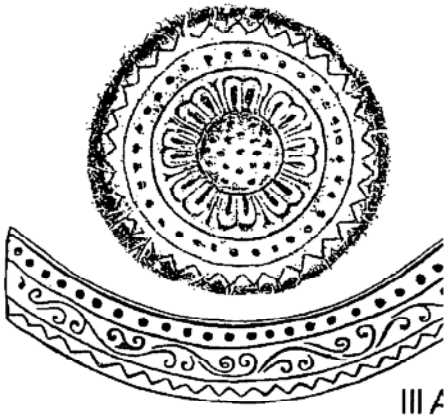
檜隈寺講堂跡

I C



I B

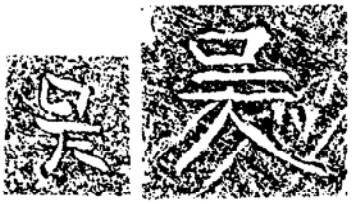
II A



III A

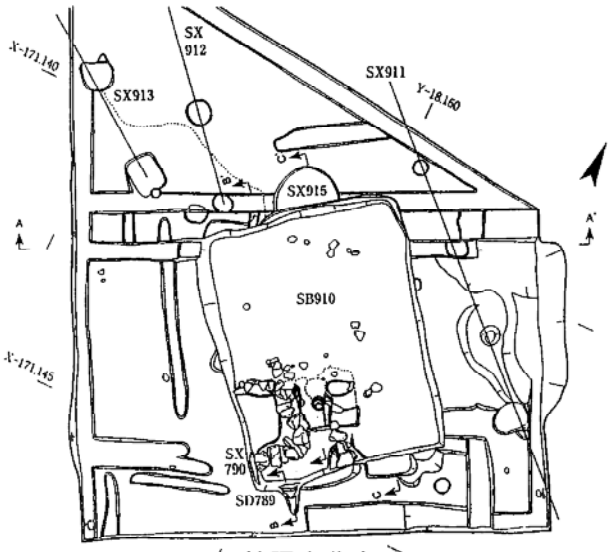
檜隈寺 軒瓦

II C

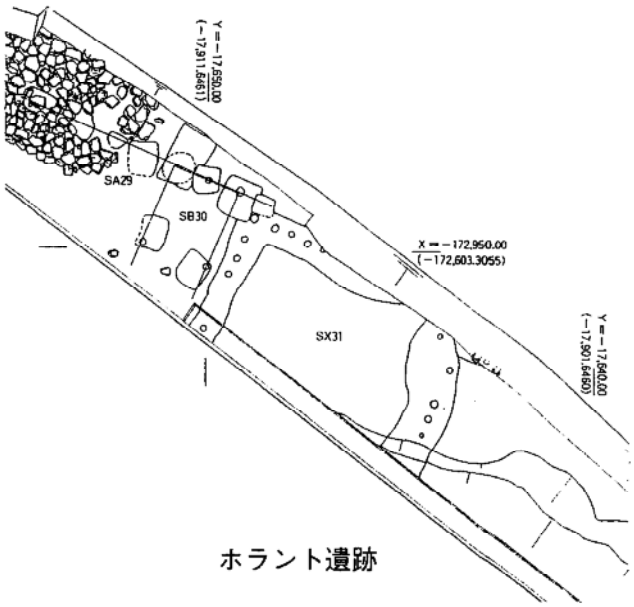


文字瓦「呉」

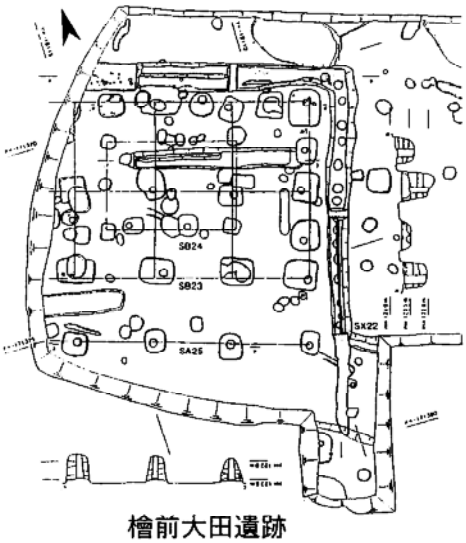
金銅製飛天像



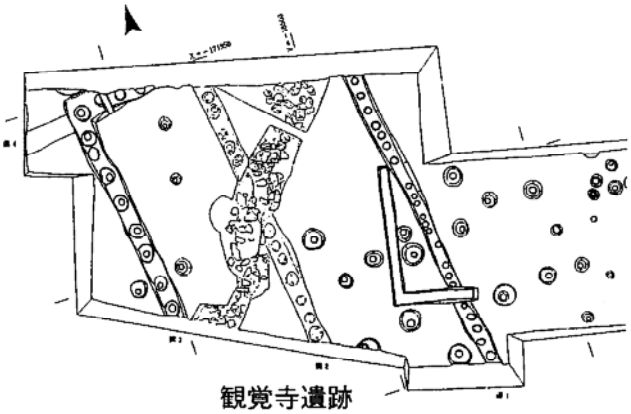
檜隈寺北方



ホラント遺跡



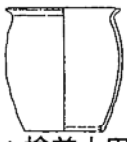
檜前大田遺跡



観覚寺遺跡

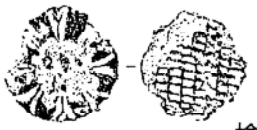
0　10m

L字形カマド・大壁建物　（各報告書から転載）



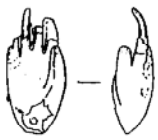
上下：檜前大田遺跡
韓式系土器

観覚寺遺跡
韓式系土器

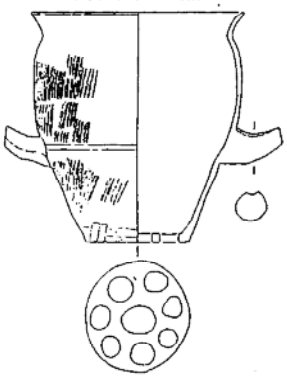


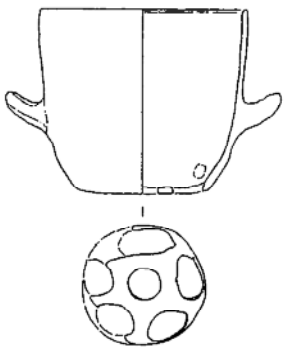
軒丸瓦

檜隈寺
北方

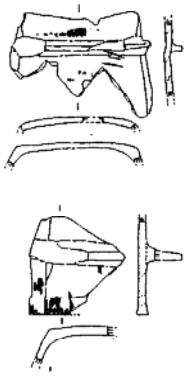


小金銅仏片





阿部山遺跡群
韓式系土器



ホラント遺跡
不明土製品

藤井イノヲク12号墳
煙突形土製品

檜隈周辺地域出土の渡来系遺物（各報告書から転載）

年代	文献資料	関連遺跡
応神20年	東（倭）漢氏の祖、阿智使主その子都加使主が十七縣の黨を率いて来る	檜前大田遺跡 桝山古墳 南山古墳群
雄略７年	東漢直掬が百済の手末才伎らを上桃原、下桃原、真神原に遷居	新沢千塚126号墳
	呉国に身狭村主青、檜隈民使博徳を遣わす	坂ノ山４号墳 清水谷遺跡
雄略14年	呉の手末才伎らを檜隈野に住まわせ、呉原と名付ける	稲村山古墳 藤井イノヲク12号墳 阿部山遺跡群
宣化元（536）年	檜隈廬入野宮	市尾墓山古墳 与楽ナシタニ１号墳 鳥屋ミサンザイ古墳 市尾宮塚古墳、真弓鑵子塚古墳
欽明７（546）年	檜隈邑の川原民直宮が良駒で大内谷を越える	与楽鑵子塚古墳 阿部山カイワラ1・2号墳 上５号墳 梅山古墳・五条野丸山古墳
崇峻元（588）年	蘇我馬子、真神原に飛鳥寺を作る 東漢直駒、崇峻天皇を暗殺	飛鳥寺
推古16（608）年	遣隋使とともに学生、学問僧に新来漢人ら名を連ねる	
推古28（620）年	檜隈陵の上に砂礫を葺く 東漢坂上直の大柱を立てる	欽明陵の改修 寺崎白壁塚古墳
舒明11（639）年	書直縣、百済大宮の大匠となる	テラノマエ古墳
皇極４（645）年	漢直等、軍陣を敷く（乙巳の変）	檜隈寺前身寺院、ホラント遺跡（大壁）
白雉元（650）年	東漢直縣ら安芸国で百済船二艘を造る	檜前大田遺跡(大壁遺構)
天武元（672）年	両陣営に加わる（壬申の乱）	
天武６（677）年	東漢氏へ七つの不可を叱責	檜隈寺金堂・西門の造営 寺周辺の掘立柱建物・塀
朱鳥元（686）年	軽寺・大窪寺と共に30年を限り封戸が与えられる	檜隈寺寺院工房 檜前大田遺跡(掘立柱建物群)
		天武天皇陵（後に持統合葬） 檜隈寺講堂・塔の造営（７世紀末） 檜前上山遺跡 マルコ山古墳 キトラ古墳・石のカラト古墳 中尾山古墳・高松塚古墳
宝亀３（772）年	坂上苅田麻呂の上奏	檜隈寺で補修（８世紀後半） 檜隈寺瓦窯（10世紀） 寺の南に幡竿支柱(10世紀前半～中頃)
永観年（983年頃）	子島寺（観覚寺）の創建［子島山観覚寺縁起］	講堂補修（11～12世紀） 十三重石塔建立（11～12世紀） 金堂廃絶（12世紀） 土坑・小穴（12世紀後半） 講堂廃絶（14～15世紀） 講堂基壇上に仏堂（15世紀）
永正14（1517）年	高市郡檜前郷に道興寺あり［清水寺縁起］	
明和９（1772）年	十三重石塔のみある［菅笠日記］	
明治40(1907) 年	於美阿志神社が現在地に移転	

表１　東漢氏の動向と周辺の遺跡

史跡・名勝 飛鳥京跡苑池の発掘調査とその成果

鈴木 一議
（奈良県立橿原考古学研究所）

１．はじめに

史跡・名勝 飛鳥京跡苑池は、高市郡明日香村大字岡に所在する飛鳥時代の庭園遺跡である。

地理的環境　飛鳥京跡苑池は、奈良盆地の南東部に位置しており、北流する飛鳥川右岸の河岸段丘上に立地している。

歴史的環境　飛鳥京跡苑池の南東には、飛鳥時代の天皇の宮殿中枢である飛鳥宮跡内郭、北東には、日本最初の本格的寺院である飛鳥寺、飛鳥川を挟んで南西には、斉明天皇の菩提を弔うために建てられた川原寺が位置している。このように、飛鳥京跡苑池は、飛鳥時代の首都である飛鳥の中心地に位置し、天皇の居所である宮殿に隣接することから、宮殿に付属する庭園であったと考えられる。

今回の報告では、飛鳥京跡苑池におけるこれまでの発掘調査とその成果を振り返る。そのなかで、主に飛鳥京跡苑池の復元整備にともない、近年継続的に実施している発掘調査で得られた成果について報告する。

２．飛鳥京跡苑池の発掘調査

（１）発掘調査以前の状況

ふたつの巨石　大正５年（1916）、大字岡小字出水において、水田の排水路の掘削中に、石英閃緑岩のふたつの巨石が掘り出された。一方の巨石は、長さ 2.2m以上、幅約 1.7mの平面形が卵倒形のもので、上面に溝が２段に掘られていた。もう一方の巨石は、長さ約 3.2m、幅 0.2～0.4mの平面形が細長いもので、上面に深さ 10～25 cmの溝が掘られ、先端には径約６cmの孔があけられていた。これらふたつの石造物は、出土状況から組み合う関係にあり、何らかの施設を構成するものであった。

謎の石造物　この石造物を最初に報告した和田千吉は、酒船石や石神遺跡出土の石造物（須弥山石と石人像）との関連から、飛鳥時代のものであることを指摘していたが、明確な時期は不明であった。また、石造物の性格をめぐっては、加工や出土状況から、導水施設の可能性などが指摘されていたが、どのような遺構にともなうものであるのかも不明であった。

このように、石造物がつくられた時期や性格については、石造物が出土した地点の発掘調査がおこなわれるまで長らく謎となっていた。

（２）飛鳥京跡苑池の発見

第１次調査　大正時代に石造物が掘り出されてから約80年を経た平成11年（1999）、石造物が出土した地点において、橿原考古学研究所が発掘調査を実施した。その目的は、石造物の出土位置の確認と石造物の性格を解明することであった。

発掘調査の結果、ふたつの石造物のうち、細長い方の石造物を掘り出した際の穴を検出し、石造物の出土位置を確認することができた。石造物出土位置の北側では、護岸に自然石を用いた石積み、底面に同じく自然石を用いた石敷きを施す大規模な池の遺構が広がることを確認した。池の遺構がつくられた時期は、出土した土器から、飛鳥時代中頃であることも明らかとなった。さらに、池の遺構のなかからは、石造物出土位置の北側延長線上において、高さ約 1.7mで頭部に孔や溝が掘られた石英閃緑岩製の石造物が新たに出土した。これらのことから、大

正時代に掘り出されたふたつの石造物は、新たに出土した石造物とともに、飛鳥時代の苑池にともなう流水施設を構成するものであることが判明した。

第２次調査　その翌年には、苑池の範囲と形状の確認を目的に発掘調査を実施した。その結果、幅約５ｍの堤を挟んだ北側にも、石積み護岸をもつ池の遺構が存在することに加え、北側の池の北側には、石積み護岸をもつ南北方向の水路がのびることを確認した。

第３次調査　継続して、堤の全容と南側の池との関係の確認を目的に発掘調査を実施した。その結果、堤の南岸が南池の北岸を兼ねること、南池に石積み護岸をもつ中島が存在することを確認した。

第４次調査　さらに、苑池の北限の確認を目的に発掘調査を実施した。その結果、南北方向の水路が北池から北へ約 80ｍのび、飛鳥川にむかって西へ屈曲することを確認した。

大規模苑池の発見　一連の発掘調査により、飛鳥京跡苑池は、南北ふたつの池と池を仕切る渡堤、北池から北にのびる水路で構成され、その範囲は、南北約 280ｍ、東西約 100ｍと広範におよぶことが明らかとなった。また、飛鳥京跡苑池は、飛鳥時代中頃に造営され、飛鳥時代後半に改修を受け、平安時代の前半頃まで維持・管理されていたことも判明した。

このように、全く知られていなかった飛鳥時代の大規模苑池の存在が、発掘調査によって明らかとなった。飛鳥京跡苑池は、飛鳥時代の政治・文化および日本における庭園の変遷を知る上で極めて重要な遺跡であるということから、平成 15 年（2003）に国の史跡・名勝に指定された。

（３）近年の発掘調査とその成果

発掘調査の再開　現在、奈良県では、飛鳥京跡苑池の復元整備を進めている。それにともない、平成 22 年（2010）から、飛鳥京跡苑池の詳細を明らかにすることを目的に、発掘調査が再開された。平成 22 年度以降、８次にわたる発掘調査（第５～12 次調査）を積み重ねてきており、飛鳥京跡苑池の詳細が徐々に明らかとなってきた。

南　池　南池については、これまで未検出であった南岸や東岸を含め、護岸の全周を検出したことから、その形状と規模が確定した。南池の平面形は、五角形で、南西隅と南東隅が隅丸状を呈する。その規模は、東西が最大で約 63ｍ、南北が最大で約 53ｍ、平面積が約 2,200 ㎡である。東岸は、崩落した石材の検出状況から、本来３ｍ以上の高さであったこと、水深は、池内にたてられた柱材の自然科学分析から、約 30 ㎝であったことも明らかとなった。

池内の施設については、中島の形状と規模が確定したほか、中島周囲の桟敷状遺構、東・西・南岸池底の段構造、東・西岸および石造物周囲柱列の存在も明らかとなった。これら南池内の各施設には、重複関係がみられ、度重なる改修の状況も判明した。

このように、南池は全面的に発掘調査がおこなわれ、その全容が明らかとなった。

北　池　北池についても、これまで未検出であった東岸や西岸の大部分を含め、護岸の全周を検出したことから、その規模と形状がほぼ確定した。北池の平面形は、南北に長い方形で、北西部が隅丸状を呈し、北東隅部が東へ張り出す。その規模は、東西が最大で約 36ｍ、南北が最大で約 52ｍ、平面積が約 1,500 ㎡である。水深は不明であるが、池の深さが 4.5ｍ以上であること、西岸と北西岸の大部分および東岸の一部の石積み護岸が、階段状であることも明らかとなった。

池内の施設については、東・西・南岸の裾部に盛土造成して施設を付加していることが明らかとなった。

水　路　水路については、南北の概ね中間地点では、石積み護岸が上下２段構造となっており、上段幅約 13ｍ、下段幅約６ｍであることを確認した。加えて、水路の堆積土中から、遺存状態が良好な海老錠の雄金具が出土した。

周辺施設　飛鳥京跡苑池の主要構成要素であるふたつの池と水路の様相とともに、苑池にともなう周辺施設の様相も明らかとなってきた。

区画施設は、石組溝をともなう掘立柱塀で、東側の掘立柱塀には南北４間（総長約 10.8m）、東西２間（総長約 5.4m）の掘立柱建物が取り付く。この掘立柱建物は、その位置関係から飛鳥京跡苑池の東門と考えられる。ただし、一般的な門は、間口が奇数となるのが通例であるが、検出した門は、間口が４間と偶数である。掘立柱建物は、主に飛鳥京跡苑池の南東部の苑池を見下ろす位置に集中して建てられていることを確認した。これらの周辺施設の多くは、飛鳥時代の後半に整備されたものであることも明らかとなった。加えて、北池の東側は、掘立柱建物などはなく、砂利敷きの空間が広がることも確認した。

飛鳥京跡苑池の変遷　近年の継続した発掘調査の結果、飛鳥京跡苑池を構成する諸要素の詳細がより明確となった。先述したとおり、飛鳥京跡苑池は、飛鳥時代中頃に造営され、飛鳥時代後半に改修を受けているが、造営当初の姿と改修状況の詳細が確認できた。特に、飛鳥時代後半の改修は、ふたつの池や水路、周辺施設にまでおよんでおり、かなり大規模であったことがうかがえる。このように、飛鳥京跡苑池全体の遺構変遷の状況も明らかとなりつつある。

３．まとめにかえて

ここまで、飛鳥京跡苑池の発掘調査で得られた成果を振り返ってきた。現在までの12次にわたる発掘調査によって、飛鳥京跡苑池の全体像が、徐々にではあるが明らかとなりつつある。しかし、依然として北池の詳細および北池と水路の取り付きの状況、水路周辺の状況など、不明確な部分が数多く残されている。よって、今後も飛鳥京跡苑池の全体像の解明にむけ、発掘調査を継続して実施する必要がある。

なお、宮殿に付属して苑池を設ける思想的背景の源流は、古代中国に求められる。飛鳥京跡苑池の全体像の解明は、東アジア世界における苑池の位置づけを考える上で非常に重要であることに加え、その後の庭園の日本化、すなわち日本庭園の成立過程を考える上でも欠かすことができないといえる。

表１　史跡・名勝 飛鳥京跡苑池における発掘調査 一覧

調査次数		調査期間	検出遺構
苑池	飛鳥京跡		
1次	140次	H11(1999).01.18～08.10	南池
2次	143次	H11(1999).11.27～H12(2000).04.20	南池・北池・渡堤・水路・掘立柱塀
3次	145次	H12(2000).05.07～08.14	北池・渡堤
4次	147次	H13(2001).11.19～H14(2002).02.28	水路
5次	169次	H22(2010).12.01～H23(2011).03.31	北池
6次	170次	H23(2011).08.01～12.21	南池
7次	173次	H24(2012).08.01～H25(2013).01.31	南池
8次	174次	H25(2013).06.03～H26(2014).03.03	南池・水路・掘立柱建物
9次	175次	H26(2014).06.02～08.08	掘立柱塀・石敷
10次	176次	H27(2015).05.25～10.30	掘立柱建物(門)・掘立柱塀・石列
11次	178次	H28(2016).06.06～07.26	掘立柱建物・石列
12次	180次	H30(2018).05.08～12.03	北池

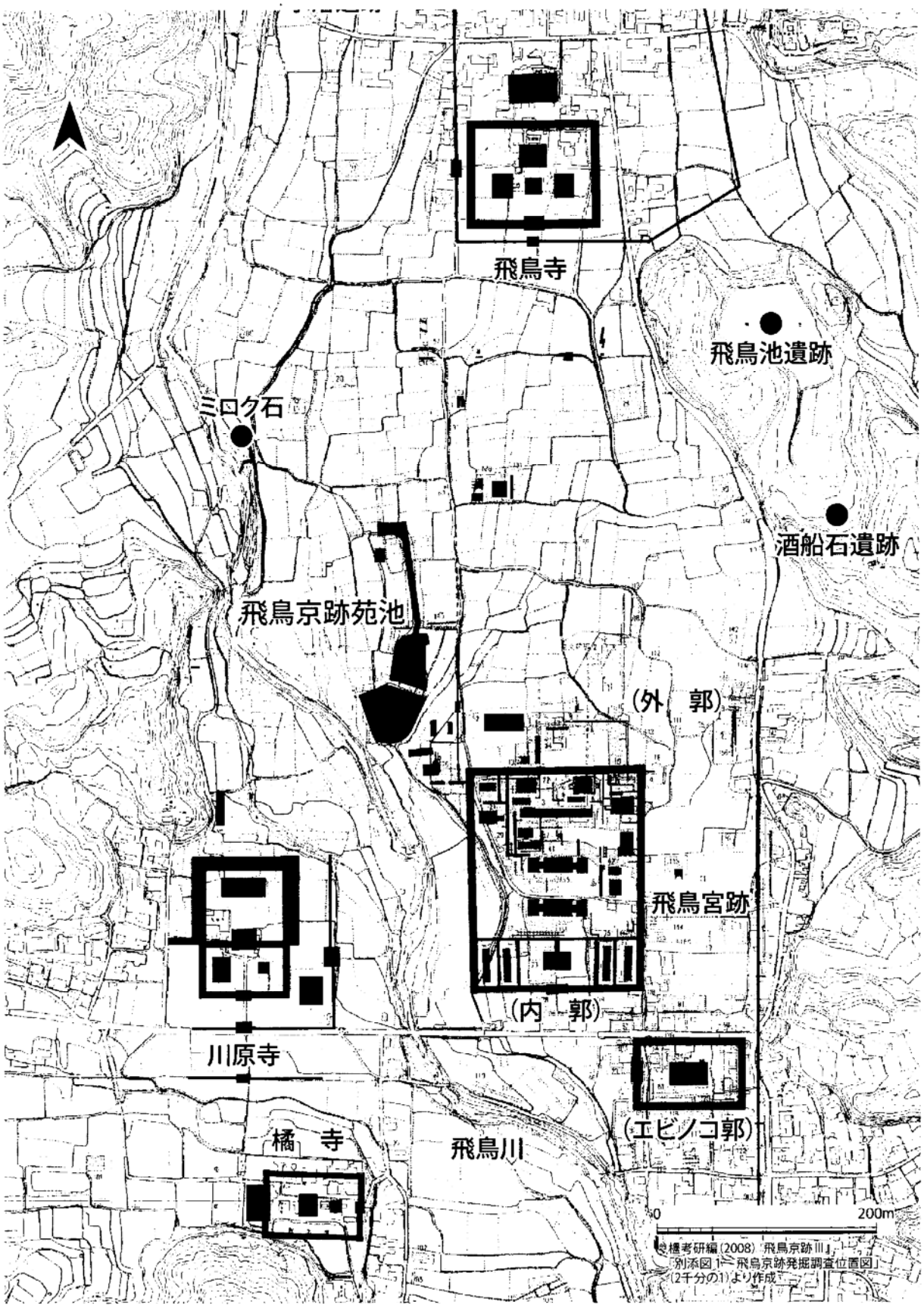


図１　史跡・名勝 飛鳥京跡苑池と周辺の主要遺跡

『史跡・名勝 飛鳥京跡苑池第12次調査（飛鳥京跡第180次調査）現地説明会資料』より

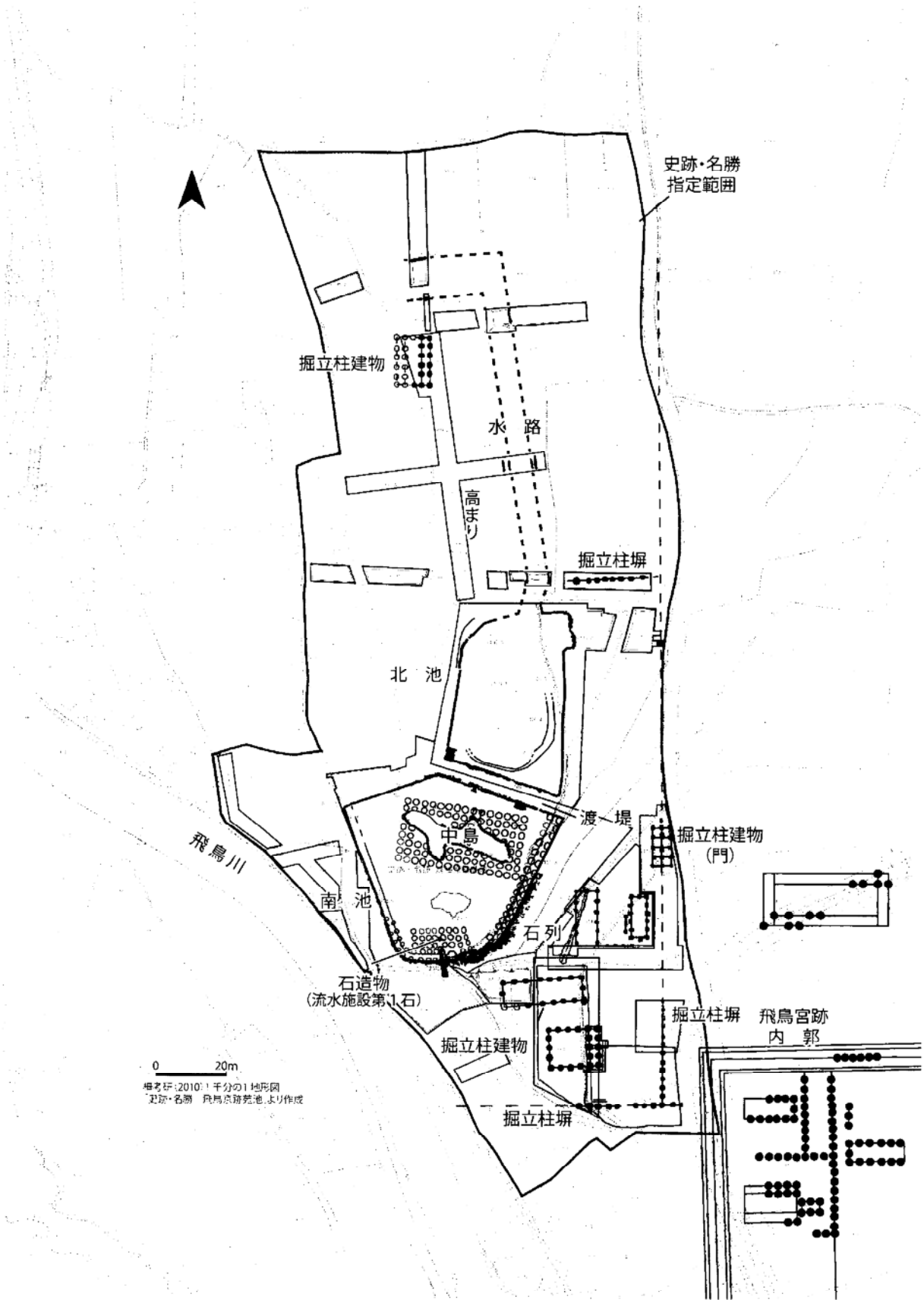


図２　史跡・名勝 飛鳥京跡苑池の遺構配置図

『橿考研通信vol. ６』より

写真１　大正時代に掘り出されたふたつの石造物（北東から）

『日本遺蹟遺物図譜』より

写真２　南池から出土した石造物（東から）

『史跡・名勝 飛鳥京跡苑池（１）―飛鳥京跡Ⅴ―』より

写真３　南池の中島と東岸から南岸（北東から）

『奈良県遺跡調査概報　2012年度』（第二分冊）より

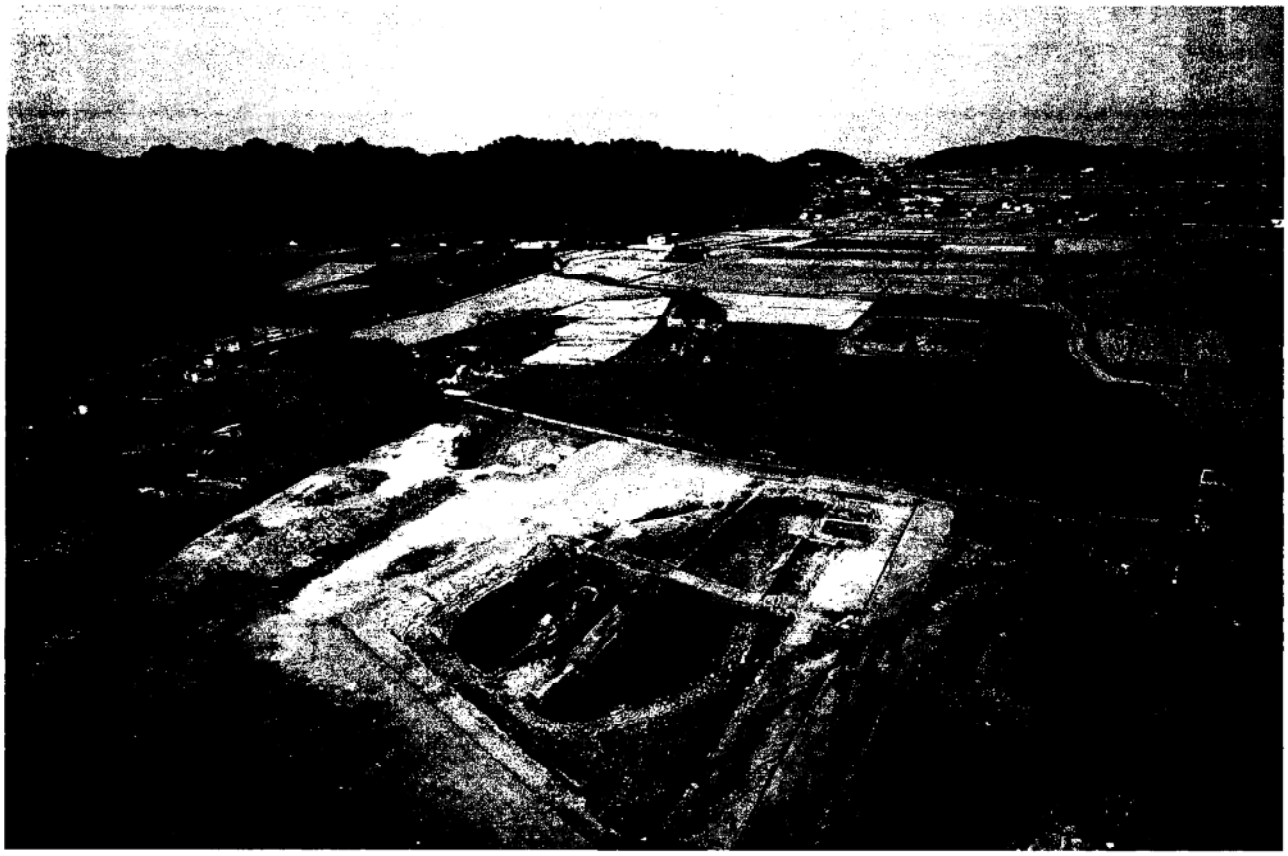


写真４　北池全景（南東から）

『史跡・名勝 飛鳥京跡苑池第12次調査（飛鳥京跡第180次調査）現地説明会資料』より

飛鳥の苑池のはじまり

木下　正史 先生

（明日香村文化財顧問・東京学芸大学名誉教授）

飛鳥の苑池のはじまり

木下　正史
（明日香村文化財顧問・東京学芸大学名誉教授）

A、宮城・都城に設けられた庭園－苑・園－

1、苑(園)：広大な敷地を占め、大きな池を設け、土を盛って台を造り、殿舎が建ち並ぶ。珍しい鳥・動植物が集められ、祭祀儀礼・宴遊が催される。

2、「嶋」の語：今日の庭園に相当する語。

1）「嶋」とは何か：司馬遷『史記』封禅書(ほうぜんしょ)によると、東海に浮かぶ蓬莱山・方丈山・瀛洲(えんしゅう)山の三神山のこと。中国の古い伝説に起源。

①蓬莱山：東海の海中にあり仙人が住み、不老不死の妙薬があるとされる霊山。

②池の中に中島を作る：「嶋」が庭園を指す語となる。

2）『作庭記』（平安時代）：「嶋」の起源に関わる記載がある。

①池中の「中島」：「蓬莱山」と呼ぶ。

②曲線を描く池の岸辺：「磯」と呼ぶ。水面を海になぞらえていることを示す。

3、「嶋」(庭園)を作ること：神仙が住む「蓬莱山」など海に浮かぶ神山になぞらえ、神仙世界を作ること。

1）『神仙伝』：神仙の逸話を集めた書。神仙が酒や琴の音を楽しみ、鶴を乗り物としたことなどが見える。

①酒宴や琴を奏でること：神仙を招くこと。

2）庭園を作り、鶴を放ち琴を弾きつつ杯を傾けること：神仙世界を作り、神仙の境地に浸り、不老不死を願うことを意味。

3）秦始皇帝：神仙思想の熱心な信奉者。咸陽城の東に造った「蘭池」に蓬莱山を築く

4）漢武帝：長安城西方の建章宮内の北方に広大な「太液池」を造り、池中に高く聳える蓬莱・方丈・瀛洲の三神山を築き、仙人が宿る壮麗な苑を完成させる。

4、日本での「嶋」のはじまり：

1）最初の記録：推古34年(626)5月条。蘇我馬子(嶋の大臣)が邸宅内に造る。

①「飛鳥河の傍に家せり。すなわち庭の中に小さな池を開れり。よりて小さな嶋を池の中に興く。故、時の人、嶋大臣という」。

②「嶋の大臣」の名：池中に嶋を作ることが珍しかったから。「嶋」は蓬莱山か。

2）草壁皇子(天武天皇皇太子)：「嶋宮」に住む。「島宮」は750年頃まで史料に見える

①『万葉集』巻2：草壁皇子の死を悼む柿本人麻呂の長歌や舎人達の挽歌がある。

・嶋の宮　勾の池の　放ち鳥　人目に恋ひて　池に潜かず(170)
・嶋の宮　上の池なる　放ち鳥　荒びな行きそ　君まさずとも(172)
・み立たしの　嶋を見る時　にはたづみ　流るる涙　止めかねつる(178)
・み立たしの　嶋をも家と　住む鳥も　荒びな行きそ　年かはるまで(180)
・み立たしの　嶋の荒磯を　今見れば　生ひざりし草　生ひにけるかも(182)
・東の　滝の御門に　伺侍へど　昨日も今日も　召すことも無し(184)
・水伝ふ　磯の浦廻の　石つつじ　茂く開く道を　また見なむかも(185)

②嶋宮の庭園：「上の池」と「勾の池」とがあり、石を並べた磯や滝口などがある。

③「勾の池」：岸辺が屈曲する池か。「鉤」として方形池とする説もある。

3）飛鳥京苑池：容器の蓋に「嶋官」の墨書。苑池を管理した役所。

5、曲水池－もう一つの苑池－

1）「曲水の宴」：古代に朝廷で行われた年中行事の一。3月上巳、後に3日に参会者が曲水に臨んで、上流から流れてくる杯が自分の前を過ぎないうちに詩歌を作り杯を取り上げて酒を飲み、次へ流す。終わって別堂で宴を設けて歌を披講する

①現在：京都城南宮、大宰府天満宮などで春と秋に観光行事として行われている。

2）起源：古代中国に起源。

①本来：陰暦の3月最初の巳日に、流れや河水に臨み沐浴して、穢を祓う水辺の儀礼

②魏(221～265)以降：3月3日に、盃を流して詩歌を詠む遊興的行事となり、宴遊化し、「曲水の宴」として確立。

3）『歴代宅京記』：「宋書礼志曰う、魏明帝のとき天淵池南に流杯石溝を設け、群臣を燕す」。「隆機云う、天泉池南の石溝は御溝の水を引き、池西に石を積みて禊堂を為る。本水は杯を流し、酒を飲む。亦た曲水と云わず」とある。

①魏の明帝時代(3世紀)：石溝に杯を流して酒を飲む行事が始まる。それは「流杯」と記され、「曲水」とは言わないとある。

4）「曲水」の語の始まり：「東晋の三世、成帝の咸和五年(330)秋に、前年一月戦災で焼けた苑城に新宮を修築したという。その頃、海西公は鐘川に流杯曲水を立て百僚を延ぶ」（『歴代宅京記』）。

①東晋の成帝の時代(4世紀)：「流杯曲水」と呼ぶようになったという。

5）王義之：晋の永和9年(353)3月、文人を会稽山の蘭亭に集め、「曲水」を催す。

①蘭亭の序：「此の地崇山峻嶺、茂林修竹あり、又、清流激湍して、左右に映帯するあり、引きて以って觴を流す曲水を為り、その次(ほとり)に列坐す」とある。

→「曲水の宴」が、文人間で流行していたことを示す。

6）宗懍『荊楚歳時記』：宗懍が育った中国南部、荊楚地方の年中行事を集めた書。6世紀中葉に成立。

①『荊楚歳時記』の記載：「三月三日(旧暦)、四民ならびに江(河)渚(小さな州)池沼の間に出で、清流に臨んで流杯曲水の飲をなす」。

②「流杯曲水」：3月3日に、河の流れや池沼の流れに酒杯を浮かべて遊ぶ行事に転化

7）六朝期(5・6世紀)：鳥を象った羽觴の上に杯をのせて曲水に浮かべるようになる

6、中国の曲水盃渠施設跡：

1）宋都の河南省登封県汀京の崇福宮の泛觴(へんしょう)亭跡。

①流盃渠：水を入れてから蛇行を多方向に繰り返し、再び入水したのと同方向に流れ去る形。曲線的に溝を穿った石槽が現存。

2）宋代の園池・園林：その中に流杯殿、流杯池などを設けたという記録がある。

3）清の紫禁城(故宮)内：東側の宮殿内に石を彫り込んだ曲水溝が現存。

4）曲水池の二種：「流下式」と「環流式」。中国では両方がある。

①慶州の鮑石亭：典型的な環流式曲水遺構。

②平城京左京三条二坊六坪の苑池：流下式曲水。

③日本庭園の曲水：飛鳥時代に流下式が萌芽し、流下式が伝統となる。

7、日本の古代文献に見える曲水の宴：

1）最古の記録：『続日本紀』大宝元年(701)3月3日条に「王親および群臣を東安殿に宴をたまふ」。「曲水」の記載はない。

①『続日本紀』神亀5年(728)3月3日条：聖武天皇が「鳥池塘(とりのいけのつつみ)に御して五位以上を宴す。また、文人を召して曲水の詩を賦せしむ」。

2）『懐風藻』：3月3日の「曲水の宴」で詠われた詩歌を収める。

3）『万葉集』：天平勝宝2年(750)3月3日、大伴家持邸で行われた宴会の歌を収める

①貴族の邸宅内：こうした「曲水の宴」を行う苑池があったことを示す。

4）日本への「曲水の宴」の伝来：宗懍『荊楚歳時記』等の影響を受けたものとされる

①『荊楚歳時記』の日本への伝来：奈良時代。当時の知識人に強い影響を与える。

5）古宮遺跡の発掘：曲水池が7世紀前半に始まっていたことを明らかにする。

B、飛鳥の苑池

1、文献史料に見える飛鳥時代の苑池：

1）推古34年(626)5月条の蘇我馬子の苑池、草壁皇子「嶋宮」の「勾の池」・「上の池」。

2）『日本書紀』推古20年(612)条：百済から渡来した「路子工」が、小墾田宮の南庭に「須弥山」・「呉橋」を作る。

①「須弥山」：仏教の世界説で、世界の中心に聳える聖なる高山。頂上に帝釈天、中

腹に四天王が住む。周囲は海に囲まれる。
3）『日本書紀』斉明3年・5年・6年の記事：飛鳥寺西や甘橿丘東の川上、「石上池辺」に「須弥山」像を造り、覩貨邏人、陸奥と越の蝦夷、粛慎を饗宴する。
4）石神遺跡出土の須弥山石：噴水石。斉明6年の「石上池辺」に作った「須弥山」か。一緒に石人像（噴水石）が出土。「石上池」は未発見。
①須弥山石と石人像：蝦夷・粛慎など辺境の民の服属儀礼を行う施設の水飾。
2、飛鳥の苑池遺跡：三種。方形池、曲水池、王宮内の大苑池。
3、方形池：島庄遺跡、雷丘東方遺跡、石神遺跡3例、飛鳥池遺跡、仙台市郡山遺跡。
4、島庄遺跡の石組方形池：明日香村島庄に所在。
1）石組方形池：人頭大の川原石を積んで護岸。内法一辺42m。高さ2m。底石敷。
2）石積護岸：垂直。外堤の幅10m。中島は未発見。
①排水する木樋暗渠：排水量の調整装置を伴う。
3）年代：7世紀初頭頃築造。10世紀末まで池状をなす。
①推古34年（626）5月、蘇我馬子が嶋宅内に造作した「小池」か？。
②島庄に所在：馬子の墓と伝える石舞台古墳に近い。
5、雷丘東方遺跡、石神遺跡などの石組方形池：
1）雷丘東方遺跡の方形池：南北長16m以上、深さ1、6mほど。推古朝の池跡。
①北岸：東西に延びる。70度ほどの傾斜で人頭大の川原石を貼りつけて護岸。
2）石神遺跡例：7世紀後半、天武朝頃の服属・饗宴儀礼の場に設けた施設。
①一つ：一辺約6m、深さ約0、8m、径50cm大の自然石を垂直に2～3段積上げ護岸。底は拳大の石による石敷（化粧と水の浄化）。導水・排水施設は未発見。
②もう一つ：一辺2、5mほど。岸に径50cm大の自然石を立て並べる。底石敷。
3）郡山遺跡例：一辺4m、深さ1、1m。7世紀末～8世紀初頭の地方官衙に伴う石組池
4）方形池の特色：大石を垂直に積んで護岸。底に石を敷く。
5）方形池の系譜：百済・新羅の仏教寺院の方形蓮池の思想と技術を導入。

6、曲池：古宮遺跡の曲池と石組小溝・周囲の石敷。
1）石組小池：径2～3m、深さ0、5mほどの不整円形。
①石組：南岸は玉石を垂直に3段積み、東・西・北は緩やかな勾配で玉石を貼る。
2）石組小溝：石組小池の西南隅からＳ字状に蛇行する幅・深さ約25cmの石組小溝。
①全長：25m以上。
3）石組小池と石組小溝の周囲：広範囲を石敷とする。
4）年代：7世紀中頃に近い前半。
5）性格：「曲水の宴」の舞台。その最古の例。
7、大規模苑池：飛鳥京苑池。後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮の宮廷庭園。
1）構造・規模：飛鳥川岸の自然地形を巧みに利用。南池と中島・北池・石組水路からなる。東西約70m、南北総長約230mに及ぶ大規模庭園。
2）特徴：直線的で垂直状の石積護岸。最高で4mを超える。底石敷。
3）石造物：導水施設。水飾り。
4）年代：斉明朝に築かれ、天武朝に部分的に改修。平安時代初期まで池状。
①『日本書紀』天武14年（685）11月6日条：「白錦の後苑に幸す」。
②持統5年（691）3月5日条：「天皇、公私の馬を御苑に観たまふ」。
5）構成：飛鳥川の奇岩と急流（滝）と、溜りの人工池をともに鑑賞する構造。
6）系譜：唐長安城の苑池、百済・新羅の宮廷庭園（内苑）の意匠・技術を受容。

C、中国の宮廷庭園

1、古代中国：外苑と内苑とがある。
1）漢の未央宮：北に防御を目的とした緩衝地帯として広大な園池（外苑）が存在。
2）唐の長安城の外苑：軍事的要素は薄まる。狩猟、饗宴の場となり、皇帝用の果物・野菜を作る農園も設け、動物を養う。

2、苑池に三神山を築く：中国に起源。
1）北魏洛陽城の華林園：「蓬莱山」がある。
2）隋の西苑：方丈・蓬莱・瀛州の三神山を造る。
3）唐長安城の大明宮の太液池：「蓬莱島」が存在。現在もその跡が残る。
4）意義：宮廷生活を彩るため、王宮に神仙世界を苑池として造ることが定着(内苑)

3、唐長安城大明宮の太液池：
1）唐：618年に隋を滅ぼす。隋の大興城を利用して都として、長安城と改名(～907)
2）長安城：東西約9、7km、南北約8、65km。世界で最も繁栄した国際都市。
①条坊街路：南北方向の大街11条、東西方向の大街14条。110坊の街区。東西市。
3）宮城と皇城：長安城の北端の中央に位置。後に大明宮、興慶宮などを建造。
4）大明宮：長安城の北東、龍首原丘陵上に位置。平面長方形状。
①城壁：南北2256m、東西1674mの台形状平面。面積320㌶。
②造営：太宗の貞観8年(634)、父の高宗のための避暑用宮殿として建設。
③龍朔2年(662)：改修。太極宮の地が多湿のため、翌年、皇帝は大明宮に移る。
④以後：歴代の皇帝が日常の政務を執る宮殿となる。
5）構造：南半分は宮殿区、北半分は内朝と園林区となる。
6）宮殿区：丹鳳門(南正門)・含元殿(正殿、国家儀式の場)・宣政殿(皇帝の日常政務・百官の行政の中心)が南北に並ぶ。
7）内朝と園林区：紫宸門・紫宸殿(内朝正殿)・蓬莱殿・含涼殿、その北が太液池。太液池の西に麟徳殿(皇帝が近臣、外国使節を招宴する)。玄武門(北の正門)。
4、太液池：「蓮葉池」とも呼ばれる。
1）『旧唐書』などの記載：池内に中島や亭があり、池の周囲に400間の回廊が巡る
①「水光瀲艶、魚浮雁落、風景如画」と表現。
2）池の主要部の大きさ：東西484m、南北310m。
5、発掘：中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所が共同発掘。2001～2005年。
1）発見遺構：池、蓬莱島、中島、道路、建物、塀、導水路、井戸、貯水池など。
6、池跡：深さ2m以上。岸辺は曲線を描く。半島状、入江状の凹凸がある。
1）西岸北半部：木杭列で護岸。岸に1、5～2m大の石を置く。
2）導水路：池の北西端。幅1～4m。90m分を検出。磚積みと杭列で護岸。数時期。
3）池岸に沿う道路：幅約20m、長さ40m分を検出。路面に轍跡。
4）蓬莱島：南岸を検出。南北の道路、その脇に磚・石組の小池跡(築山・景石を伴う小庭園)、敷石遺構、建物の礎石などを検出。
①蓬莱島の規模：東西約100m、南北約50m。版築して築く。
5）西方の中島：東西・南北60mほどの方形状。池の北岸から中島に至る建物がある
6）池の東南岸：版築で築く。曲線状になるところと、直線状になるところがある。
①曲線状の部分：岸の傾斜が緩い。
②直線状になる部分：急傾斜。
③護岸：木杭、磚積み、磚貼などで護岸。片麻岩を立てた景石がある。
④池の水上に張り出す廊状建物、釣殿：その岸辺は直線的で、垂直に近い。
⑤出土遺物：瓦・鴟尾・獣面塼・蓮華紋塼が大量に出土。石製欄干片、蓮葉が出土
⑥石製欄干破片：高さ66cm、幅126、5m、厚さ15、5m。龍文・巻雲文を浮彫。

D、百済の苑池

1、朝鮮半島諸国の苑池：高句麗安鶴宮、百済宮南池、新羅雁鴨池など宮廷庭園がある
2、百済の苑池：
1）『三国史記』辰斯王7年(391)条：「春正月　重修宮室　穿池造山　以養奇禽異卉」
①辰斯(しんし)王：漢城の宮室を修築し池を掘り、山を造って禽獣・草花を育てる。
3、熊津時代(474～537年)の苑池：
1）東城王22年(500)条：「春　起臨流閣於宮東　高五丈　又穿池養奇禽」。

①宮内に臨流閣を建てて、池を掘り、奇禽を飼う。
②公山城：公州市、錦江沿いの独立丘陵上。長方形の石組池を発見。
4、泗沘時代(538～660年)：王宮を扶蘇山と白馬江(錦江)の南に建設。
1）武王35年(634)条：「春三月　穿池於宮南　引水二十余里　四岸植以楊柳　水中築島嶼　擬方丈仙山」。宮の南に20余里水を引いて池を作り、四岸に楊を植え、水中に方丈仙山(神仙思想に基づく三神山の一)に擬えた島を造る。
2）「宮南の池」：現在の宮南池を指す。方形池で、望海亭と望海楼が存在。
①宮南池跡：池内から木簡が出土。規模、構造などは不明。
3）百済扶余の方形池：王宮跡、定林寺(6世紀後半)、益山弥勒寺(7世紀)で確認。
①官北里遺跡：王宮跡。石築の建物基壇、暗渠、蓮池、井戸、道路・側溝を検出。
(a)蓮池：方形池。一辺約6m、深さ約0、9m。割石を5～6段に積む。蓮葉・茎出土
②定林寺の方形石組池：中門の前方。垂直の石積護岸。蓮池。瓦・木簡・蓮実出土
③益山弥勒寺の方形石組池：蓮池。垂直の石積み護岸。

E、新羅の園池

1、三国時代・統一新羅時代の王宮：月城。婆娑王22年(101)から王宮として使用。
1）月城：半月形の丘陵上を利用。南に南川が流れ、自然の濠をなす。
2）月城の規模：南北260㍍、東西900㍍、周囲2600㍍。東・北・西側に水濠を設ける

2、雁鴨池：統一新羅時代の苑池。月城の北東に位置。雁鴨池は朝鮮時代の呼び名。
1）『三国史記』文武王14年(674)条：「二月、宮内穿池造山、種花草、養珍禽奇獣」
①文武王：半島統一を記念して、宮内に池を掘り、山を造り、花草を植え、珍禽奇獣を飼う。
2）『三国史記』文武王19年(679)条：「二月、重修宮闕、頗極壮麗」。臨海殿を築造
3）『三国史記』孝昭王6年(697)条：「九月、宴群臣於臨海殿」。
4）雁鴨池跡出土の遺物：「洗宅」とある木簡、「龍王辛審」「辛審龍王」の文字を刻む土器が出土。
①「洗宅」、「龍王辛審」「辛審龍王」：『三国史記』職官に見える「東宮官」に所属する洗宅、月池典、僧坊典、月池獄典、龍王典と関係。
②出土文字資料：鴨雁池は「東宮」の苑池で、「月池」の名であったことが判明。
③674年に文武王が造った苑池：「月池」で、「東宮」を兼ね、「臨海殿」がその正殿。
④「月池獄典」：「東宮官」中にある月池の造営を担当する部署と推定される。
⑤月池獄典の所属役人：大舎2人、水主1人が所属。
5）廃絶：935年、新羅滅亡とともに廃絶。
3、雁鴨池の発掘：1973～75年に発掘。
1）規模：東西200m、南北180mの範囲に築く。周囲約1000mの豪壮な池。
①池の南岸と西岸：直線的に屈折。垂直の石積護岸(横長石を整然と積み上げる)。その上に東宮の正殿を中心とした多数の礎石瓦葺建物群を配置。
②東岸と北岸：大きく出入りする岸辺。各所に景石を配し、巫山12峰の仮山を築く
③奇石：散置、群置、畳置など多数使用。
2）西岸の西側：東宮建物を配置。正殿(臨海殿)、便殿、寝殿などの建物群を配置。
3）池内：大(1000㎡))・中(600㎡)・小(60㎡)の三島を造る。
①三島：神仙思想で説かれる東海の海中にあったとされる蓬莱山・方丈山・瀛州(えんしゅう)山の三神山を造形したものか。出入りがある岸辺を石積護岸(高さ1、7m)
②巫山12峰の仮山：中国の故事に登場する仙女が住んでいるという仙境を造形。
4）池の底：石灰を突き固め、碁石のような黒石を一枚敷き、水草の繁茂を防ぐ。
5）引水口：東南隅に引水口。大きな石を積んで滝状にして水を引く。
①池の東南側：石組導水路が南から導かれ、その途中に二つ石造水槽を配する。石造水槽の出口に堰と小孔がある。
②石造水槽の両側：人が坐れるように平坦となる。

③サイコロ状酒令具：14個出土。各面に「杯をあけ、歌え」などと刻む。饗宴の場。
6）船付場：東北隅の奥にある。木舟を停泊させる。小型木舟3隻が出土。
7）遺物：金銅製仏像、押出仏があり、仏教関連施設を伴うか。
8）「儀鳳四年(679)皆土」の刻銘ある瓦片出土：『三国史記』の造園記事と一致。

4、龍江洞苑池：慶州市龍江洞、月城の南3、5kmkmに位置。慶州盆地の北側。東から西への緩傾斜地に立地。1998・99年に発見。
1）苑池：統一新羅時代。石組池、人工島2ヵ所、導水路、受水施設、各種景石、建物2棟、橋脚、道路側溝などから成る。一部は発掘区外に入る。
①石組池の規模：東西38m、南北66m以上。護岸総長140m以上。面積2508㎡以上
②苑池の石組護岸：東側・西側・南側を確認。北側は発掘外。
2）石組池の形：方形に近い。深さ0、8m。岸辺は直線状と緩い曲線状とを組合せる
①東側護岸：直線的。建物1棟と、建物から中島に渡る橋脚を設ける。
3）護岸石組：山石・川原石と簡単に加工をした長方形割石を使用。粘土で裏込め。
①池底：砂・礫石混りの基盤層上に、厚さ20㎝で褐色粘土を敷き水漏れを防ぐ。その上に小石などを敷く。南に高く、北に低くなる。北側に排水口か。
②西側石組護岸の外側：道路とその側溝がある。
4）中島：南北約25m、東西約20、5mの方形状。周囲108m。残存高0、8m。東岸から6、6m、西岸から7、6m、南岸から7、6mに位置。南半部の岸辺は出入りが多い
①石組護岸：長40～70㎝、高さ30㎝ほどの割石、川原石を垂直に3段ほど積む。護岸の高さ約60㎝。10㎝大の川原石、割石で裏込め。
②東側中央部：方形台状に突出させ、橋で東岸と連結させる。
③中島の方形台東北側の池底：横80㎝、縦40㎝、高さ30㎝の青石を置き、周囲に10㎝大の川原石を敷く。流水を分けると同時に、景石の役割を果たす。
④島B：中島の北15㍍に位置。ごく一部を確認。長40㎝、高さ30㎝の方形割石を積んで護岸。1段分、高さ30㎝を確認。
5）建物跡と木橋橋脚跡：
①建物1号：東側石組護岸の外接地に位置。南北3間(柱間3、4m)、東西1間(2、8m内外)。根石8ヵ所を確認。径20㎝内外の川原石を径1mほどの円形に据える。
(a)瓦葺建物：付近から多量の瓦、鬼面瓦、軒丸瓦などが出土。
②橋脚：中島と建物1号を結ぶ木橋。建物1号の中央間と連結。礎石根石(径1、2m、20㎝大の川原石を使用)。東西3間(長さ8m)、南北1間(幅3、2m)。
③建物2号：東南側石組護岸の南東に位置。南北2間(柱間3、0m)、東西1間(3、0m)池への導水溝を跨ぐ。礎石据え付け跡4ヵ所(径1、2mほど)を確認。
6）導水施設：建物2号下を抜ける石築の導水施設。建物2号の北で西に曲がる。全長約16mを確認。南から北へ傾斜する。底に長40～70㎝、幅30～40㎝、厚さ10㎝の平たい長方形割石を敷き、両岸に幅・長さ30㎝大の長方形割石を立てる。
①受水施設：池の南辺中央部の石組護岸の池底に位置。導水施設からの水を受ける長さ60㎝、幅40㎝、厚さ15㎝大の長方形割石を三段に敷く。
②石組水路：西側石組護岸の外側5mに位置する南北石組溝。長さ62、4m分を確認幅50～120㎝、深さ30～100㎝。屈曲があり、曲水施設か。
7）遺物：中島の方形台、建物1号、橋脚の周辺から集中出土。
①大半：瓦類。軒丸瓦、平瓦が主体。軒丸瓦200点余。鬼面瓦5点、軒平瓦片。
②軒丸瓦：統一新羅時代の典型的形式の重弁蓮華文軒丸瓦。
③土器類：印花文土器片多数。付加口縁長頸壺、瓶形土器、台付碗、蓋など。
8）池の年代：重弁蓮華文軒丸瓦、印花文土器から、統一新羅の8世紀代。
9）苑池の性格：雁鴨池と類似した宮廷苑池的性格。華麗な瓦葺礎石建物を伴う。
①龍江洞遺跡：雁鴨池と違い、全体に曲線を生かす柔らかい岸辺となり、島に渡る橋を設ける。

5、鮑石亭：慶州南山西側の渓谷にある。
1）性格：新羅離宮の一。曲水宴場の流盃渠を前面にもつ庭園建築。礎石が残る。
2）曲水溝の構造：幅狭い石の上面に、幅約30㎝、深さ20㎝、全長22mの水を流す溝を穿ち、それを鮑貝状に曲がるように並べる。環流式曲水。
①入水部：円形の受皿状水槽を穿つ。
②受皿状の入水水槽から緩勾配の曲水溝を通り、末端は現在垂れ流し状態。

F、平城宮・平城京の苑池

1、『続日本紀』記載の苑池：南苑、西池宮、松林苑、鳥池塘、城北苑、楊梅宮南池。
1）平城宮・平城京内発掘の奈良時代庭園遺跡：20遺跡に及ぶ。
2）松林苑：樹林がある広大な敷地。秦・漢の上林苑(じょうりんえん)の系譜を引く「禁園」
2、平城京大宮人の理想：中国文人貴族の生活。
1）正月、3月3日、5月5日、9月9日などの節日、11月の冬至の饗宴など：重要な年中行事となる。
2）3月3日の「曲水の宴」：『続日本紀』に726年、728年、730年、762年、772年、777年、778年、779年、784年の9回見える。726年は「宴」とあるが、他は「曲水」とある。奈良時代に、「曲水の宴」が定着していたことを示す。
3）平城宮での「曲水の宴」の行事に使う庭園施設：宮内にいくつかある。
3、平城宮東院庭園：平城宮の東張出部の東南隅に位置。約7000㎡の範囲を区画。
1）時期：奈良時代を通じて存続。2時期。天平勝宝年間(749～756)頃、大改修。
①池の規模：東西・南北ともに60mほど、深さ0､4m。礫敷の凹凸のある岸辺。
2）奈良初期の池：比較的に単純。直線的な汀線で構成。汀の緩傾斜面に玉石を敷き詰める。飛鳥時代の方形池の特色を残す。岸辺の底は平たい石による石敷。
①苑池の南側：曲折した玉石敷の流れを作る。
3）奈良後半改修後の池：前半の池を埋め立てて作る。礫敷の州浜を活かした庭園。
①形状：屈曲のある複雑な出入りのある汀線。その随所に景石を据えて変化を加える。東北端に立石からなる築山石組が完全な姿で残る。南に中島を設ける。
②景石：奈良盆地東部で採取した褶曲のある片麻岩と花崗岩を使う。
③景石・石組：前期の東院庭園には見られない豊かな風致を加える。
④渚や底：全体を礫を敷いて浅い州浜とする。
⑤建物：楼閣、池にせり出す建物、橋を作る。意匠的に繊細、華麗な構成となる。
⑥小形丸木舟：長0､6m。池内出土。杯を載せれば羽觴。曲水の宴で用いたもの。
⑦瓦：緑釉瓦・三彩瓦が出土。華麗な建物が建つ。
4）奈良時代庭園の代表的存在：岸が大きく蛇行し、使う石も小さく、池底も浅い。
①意義：大陸から受容した方形池庭園を超克。その後の日本庭園の源流となる。
5）性格：神護景雲元年(767)4月14日、東院に玉殿が完成。東院玉殿に伴う苑池。
6）出土植物遺存体：マツ属、ツツジ属、ヤナギ属、モモ、ウメ、ツバキなど。

4、左京三条二坊六坪の宮跡庭園：奈良時代後半の曲池。時代を超えた名園。白眉。
1）2町の敷地：坪のほぼ中央部に、規格性高く、建物と南北に長い曲池を配置。
2）苑池：長さ55㍍、流れの幅5～11㍍、深さ約30㌢。全体を精緻な石組で築く。
①構造：大きく蛇行する岸辺、底に玉石を敷き詰める。両岸に築山や景石を配し、2ヵ所に桝を設け、水生植物を植える。導水・排水のための木樋を伴う。
②汀線：玉石を一石立て並べて曲線状の岸辺とし、その外側は緩やかな勾配で玉石敷へ続き、次第に礫敷きとなり建物へ達する。
③景石：池が屈曲する所に一群の景石を据え、湾曲する外側はなだらかな州浜状の汀線とする。変化に富んだ渓谷や海岸の景観を表現する。
④出土植物遺存体：クロマツ、モモ、ウメ、ツバキ、センダンなど。
3）性格：流れに杯を浮かべて詩歌を詠む「曲水の宴」が催された苑池。
4）建物の配置：苑池の北と東を掘立柱塀で囲む。池の西側に南北8間、東西4間の礎

石建物を配置。規格性高く配置。東の春日奥山を借景とする。

5）「広庭」：建物と苑池との間に広い空閑地を設ける。細石による礫敷。

①性格：西側の礎石建物とともに、儀式の場として使用。曲水の宴もその一つ。

②建物・広庭、園池の空間構成：寝殿造住宅庭園の空間構成の祖形。平安時代庭園の「遣水」に類する「曲水」。

6）宮跡庭園：高い技術による見事な苑池。平城宮と同笵瓦が出土。平城宮に関係する公的な庭園とされる。

5、『万葉集』・『懐風藻』：曲水の宴、嶋を題材とした詩歌が数多くある。

1）「嶋」の情景：嶋（中島）には鶴、鴛鴦が遊び、池は浅く、曲線を描く磯には小波が打ち寄せ、松や梅、馬酔木などの植込がある庭園が復原できる。

6、奈良時代の苑池の二種：

1）中島がある園池：東院庭園、『万葉集』に見る「嶋」のある庭園。

2）曲水のみの庭園：宮跡庭園など。

3）「嶋」がある庭園と曲水（遣水）の一体化：平城宮東院庭園はその過渡的姿を示す。

7、平安時代の苑池：

1）寝殿造住宅の庭園：

①寝殿造：平安時代に生まれた貴族住宅形式。

②寝殿造住宅の庭園：建物群の前面に白砂敷の「広庭」と「苑池」のある大きな庭園。

③寝殿造住宅：庭園は建築とともに儀式や宴遊になくてはならない空間装置となる

2）浄土寺院の庭園：浄土世界を具現した庭園。

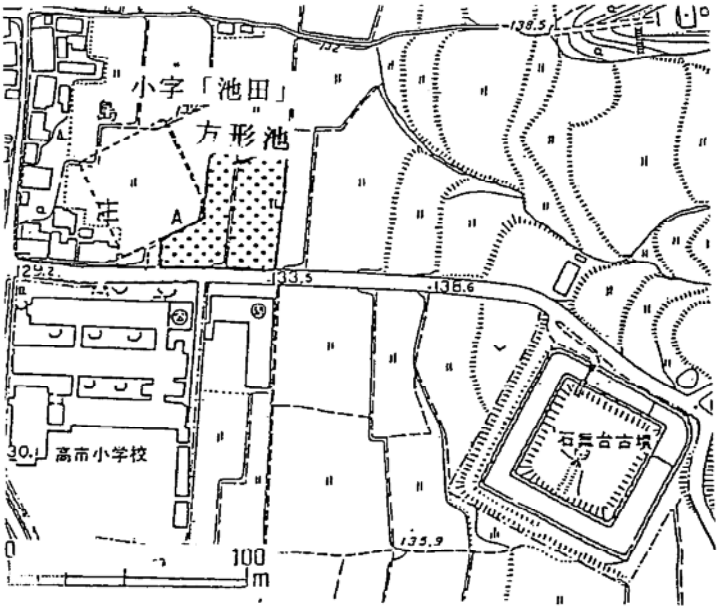
①出現：寝殿造住宅庭園にやや遅れ、平安時代後半の11世紀中頃に出現。

②起源：寝殿造住宅庭園で完成されていた庭園様式を寺院で採用。

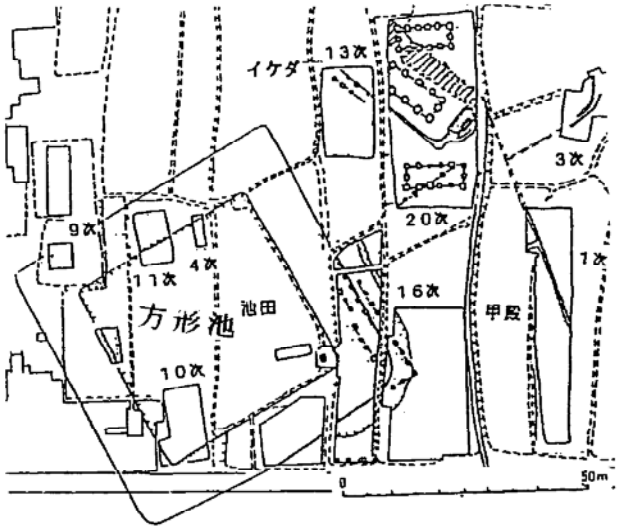
③方形池：仏教とともに大陸から伝わったが、8世紀以降衰退。浄土伽藍の苑池では採用されず。

④遺跡：平等院、浄瑠璃寺、平泉の毛越寺・無量光院の庭園など。

3）礫敷の州浜：寝殿造住宅や浄土寺院の庭園でさらに洗練される。

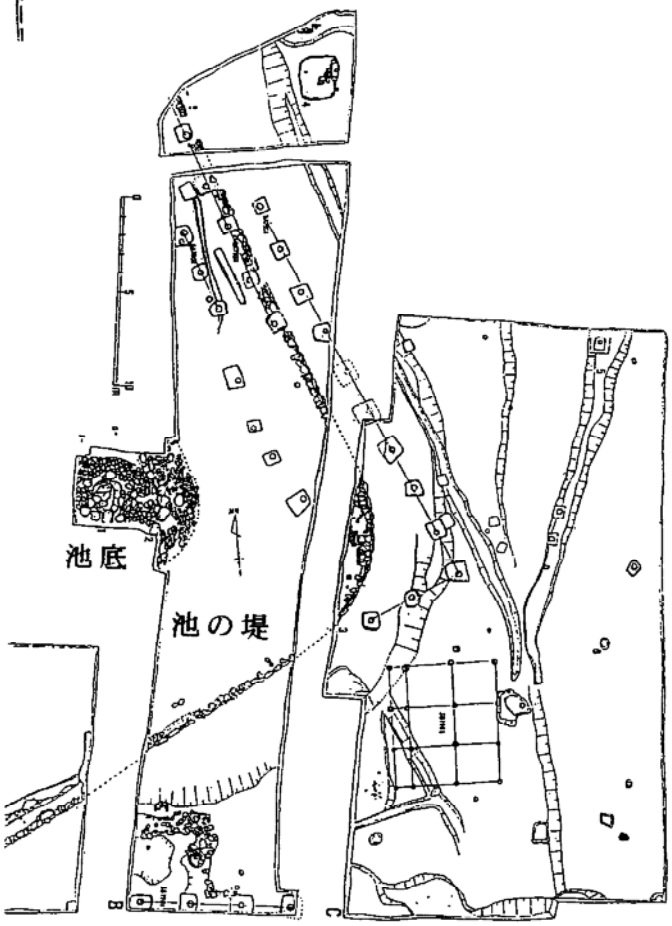


1、島庄遺跡と石舞台古墳

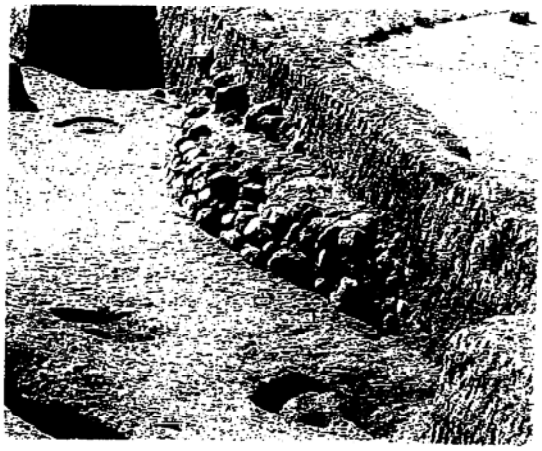


2、島庄遺跡の方形池

3、方形池の外堤



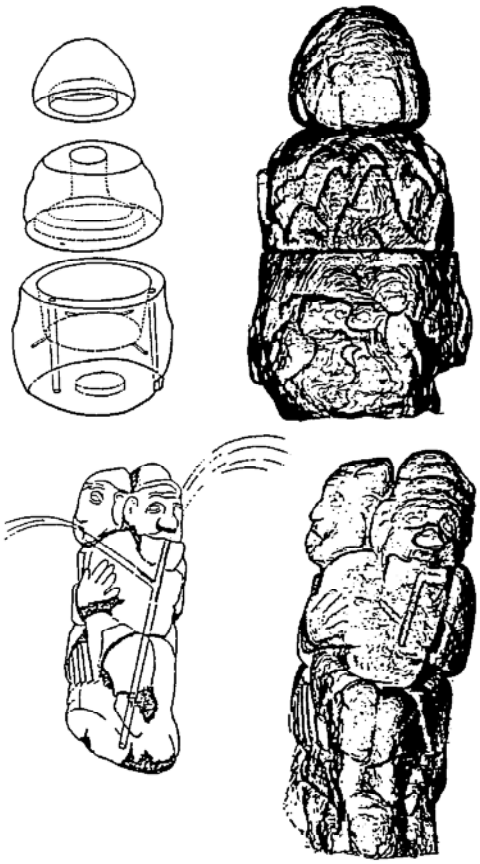
4、方形池実測図



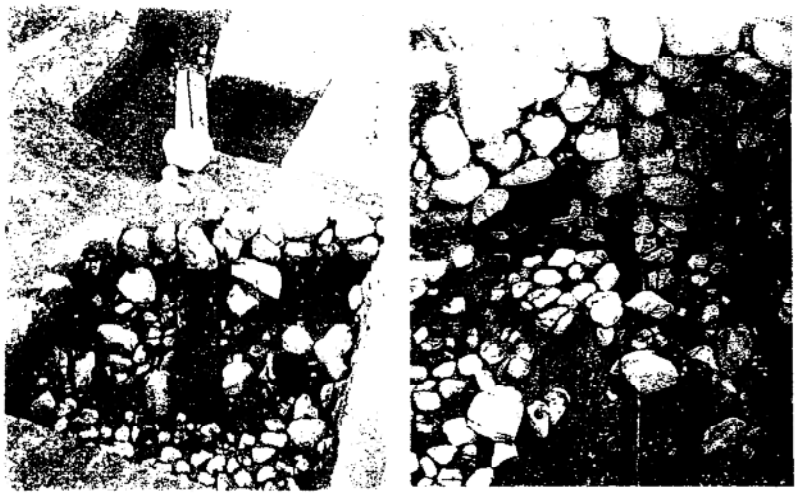
5、外堤外側の石積み

6、島庄遺跡の護岸と石敷

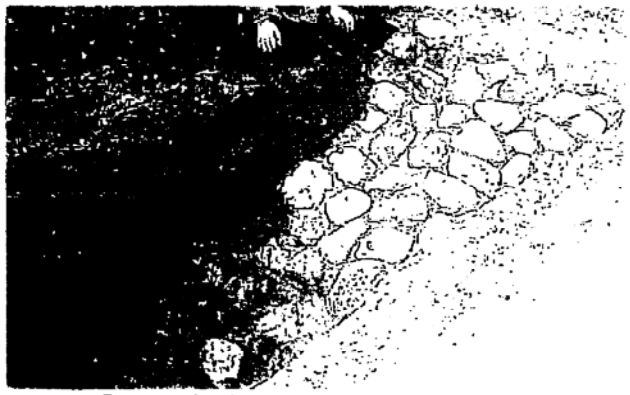
B



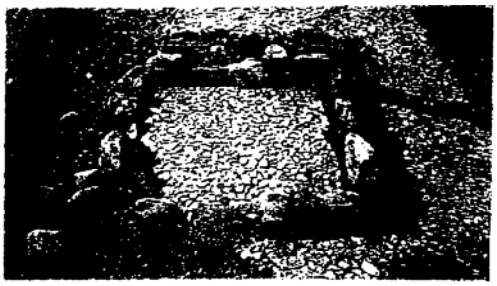
3、石神遺跡の須弥山石・石人像



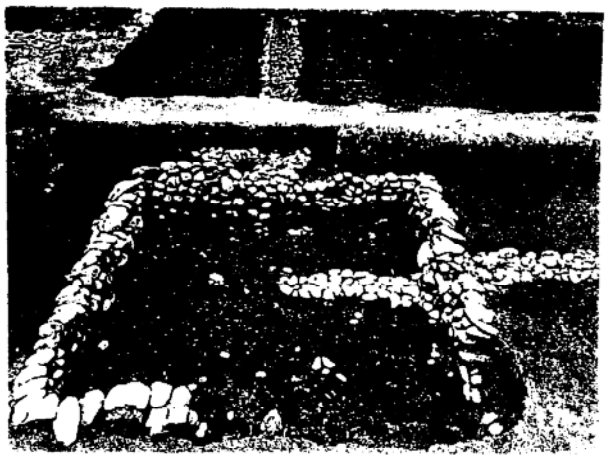
1、島庄遺跡方形池の護岸と木樋暗渠



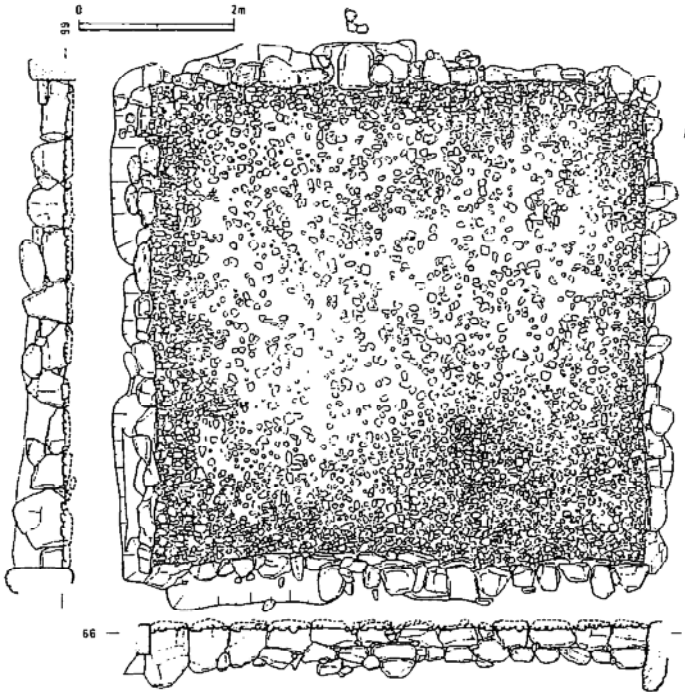
2、雷丘東方遺跡の石組池

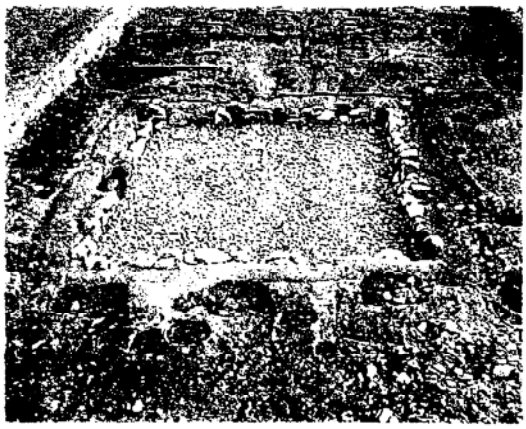


5、石神遺跡の小型石組池

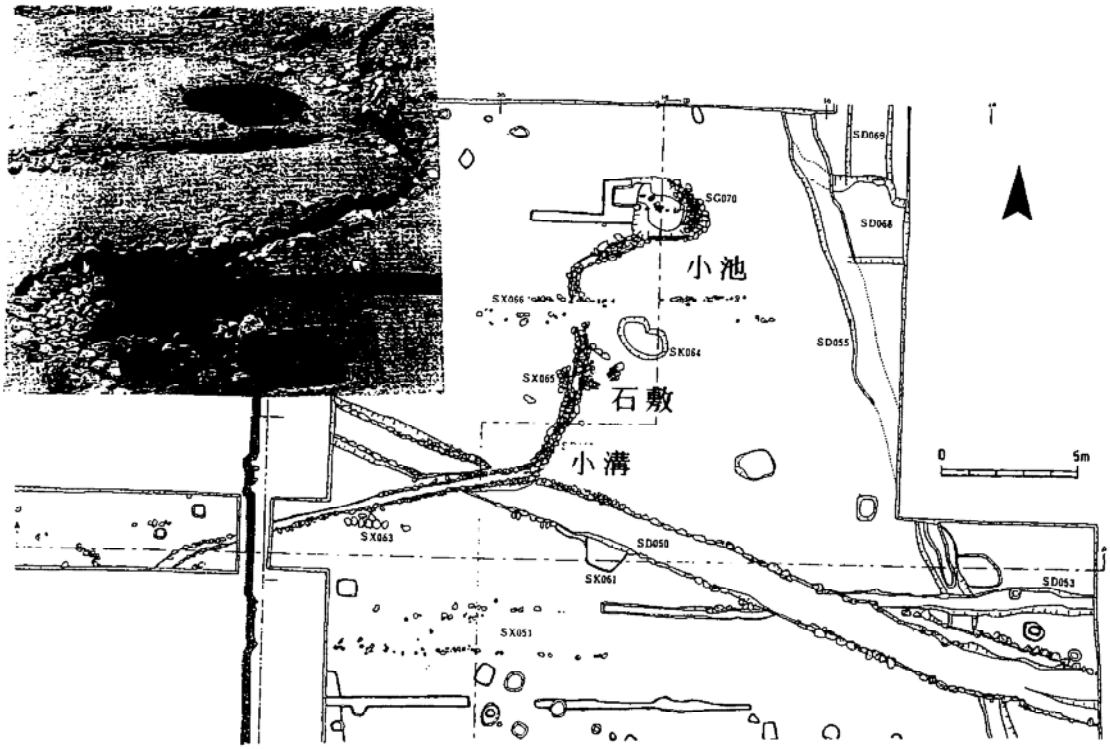


6、郡山遺跡の方形石組池





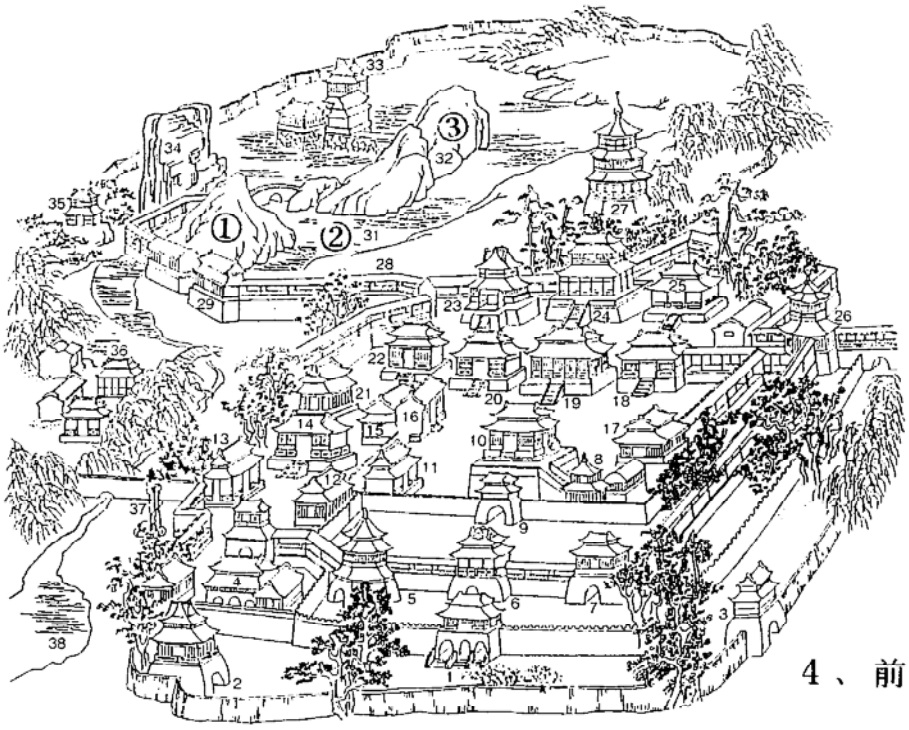
4、石神遺跡の方形石組池



1、古宮遺跡の苑池

2、古宮遺跡の石組小池

3、古宮遺跡の石組小溝・石敷

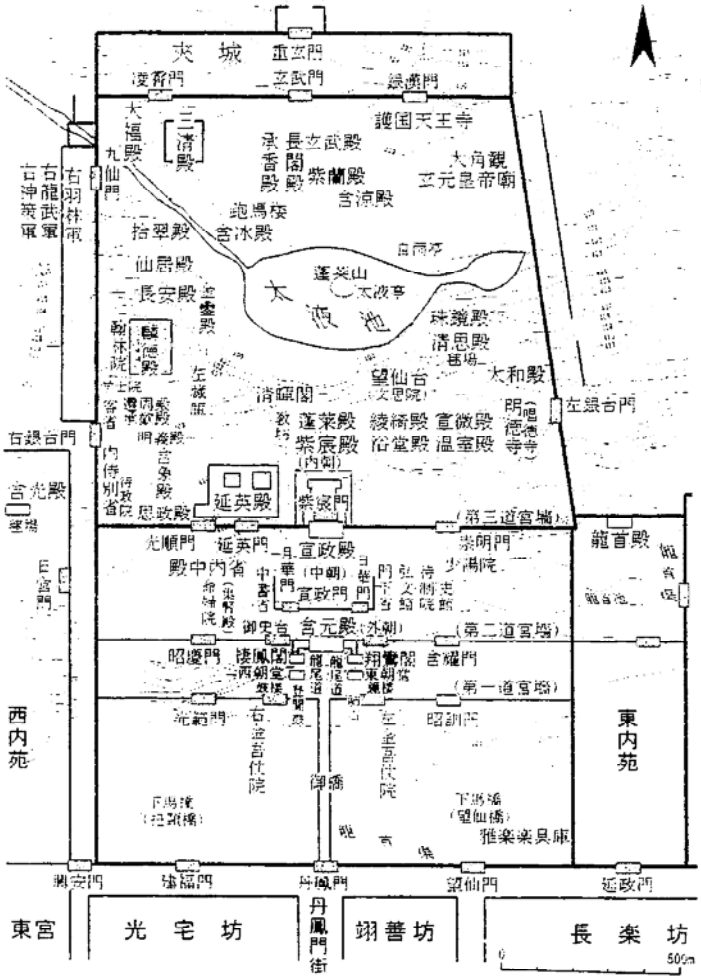


①蓬莱山　②太液池

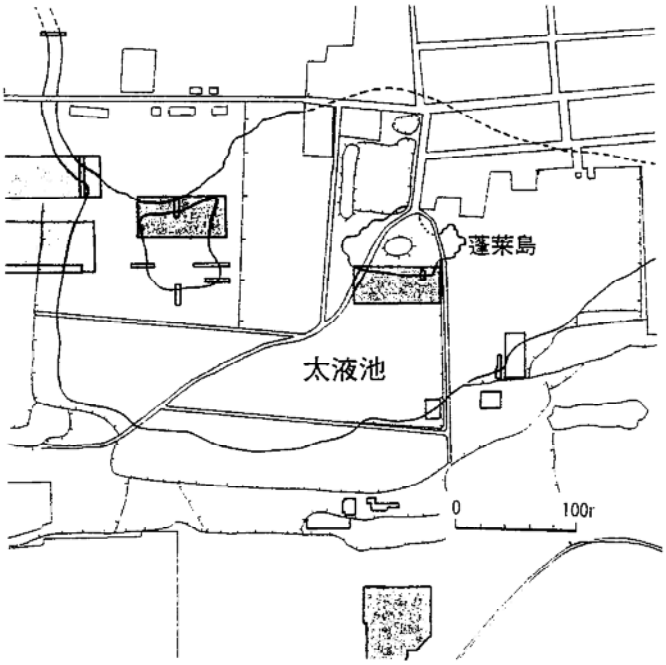
③瀛洲山

4、前漢建章宮復原図

D



1、唐長安城の大明宮と太液池



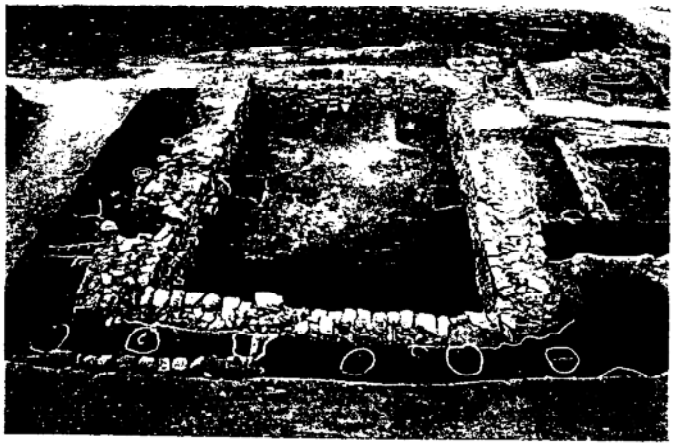
2、大明宮の太液池

3、太液池の護岸杭列

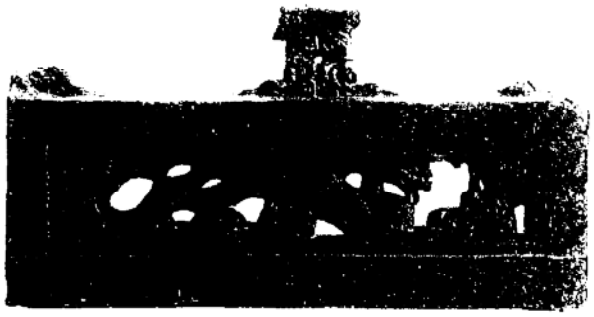
4、太液池の蓬莱島

5、太液池北岸と中島間の建物跡

1、太液池の導水路

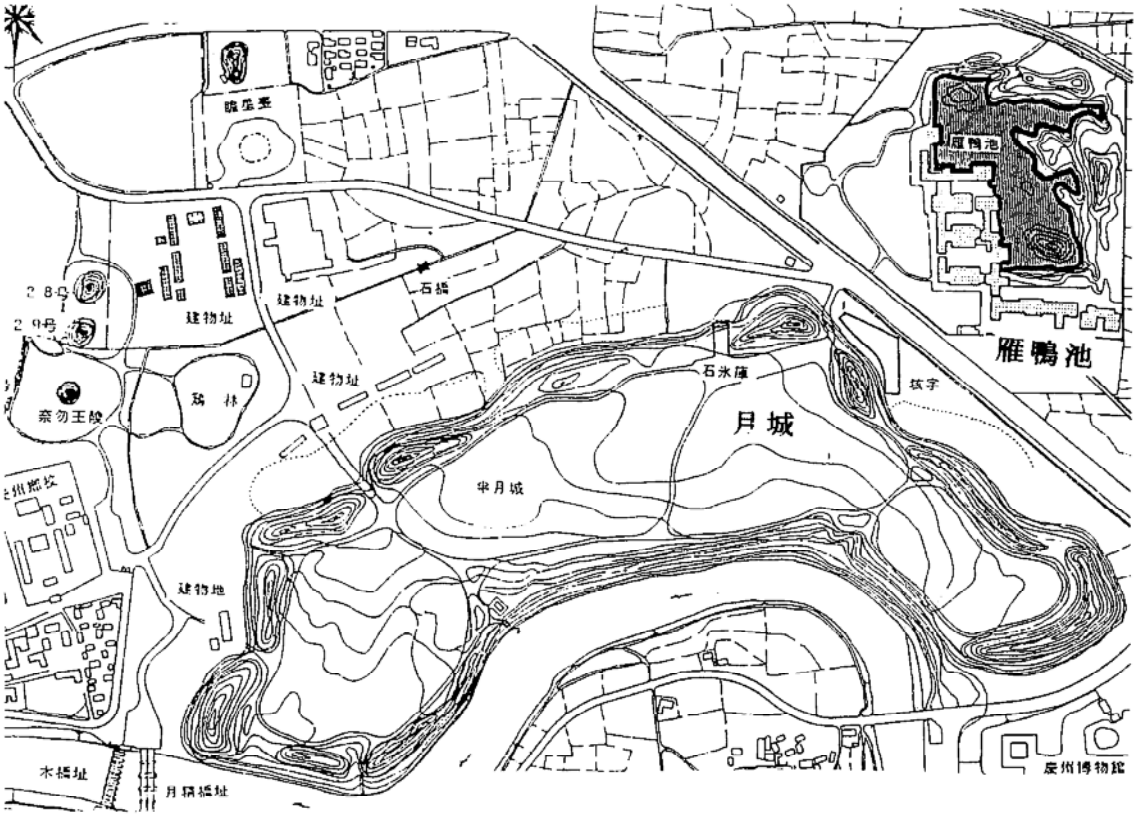


3、扶余官北里遺跡の方形池



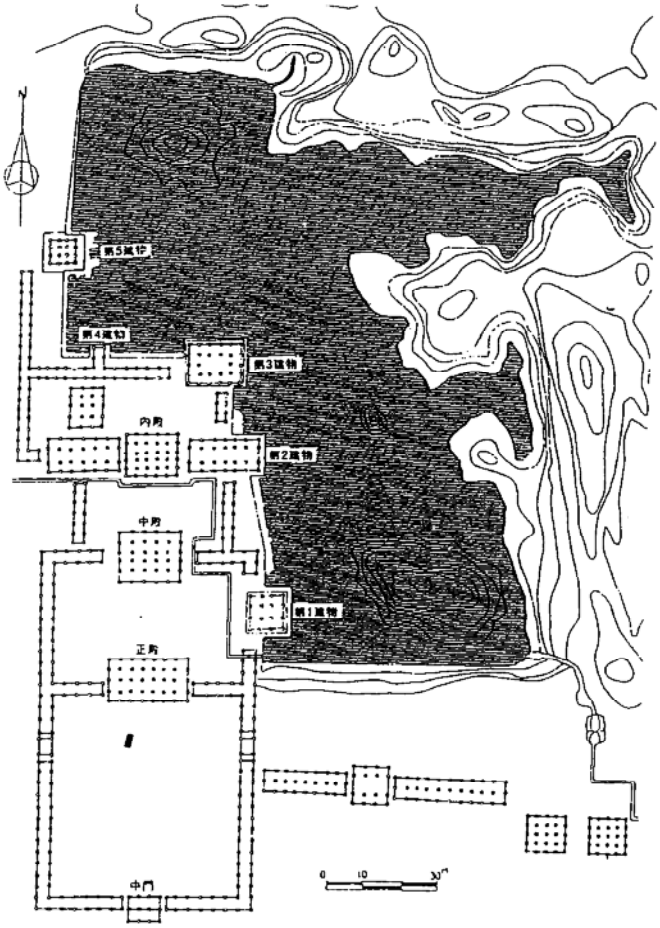
2、太液池出土の欄干

4、扶余定林寺の蓮池



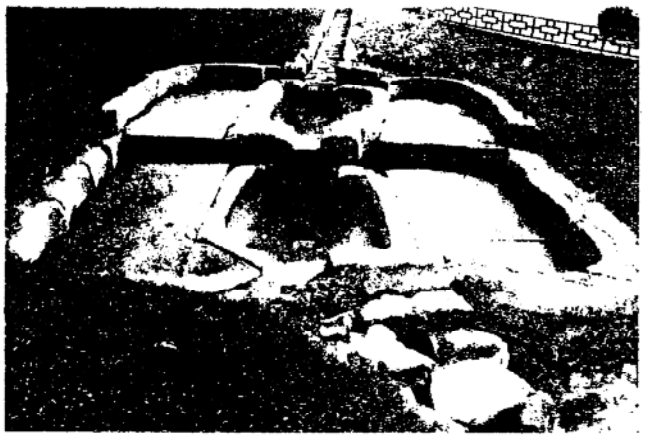
5、新羅・慶州の雁鴨池と月城

F



1、新羅・慶州の雁鴨池

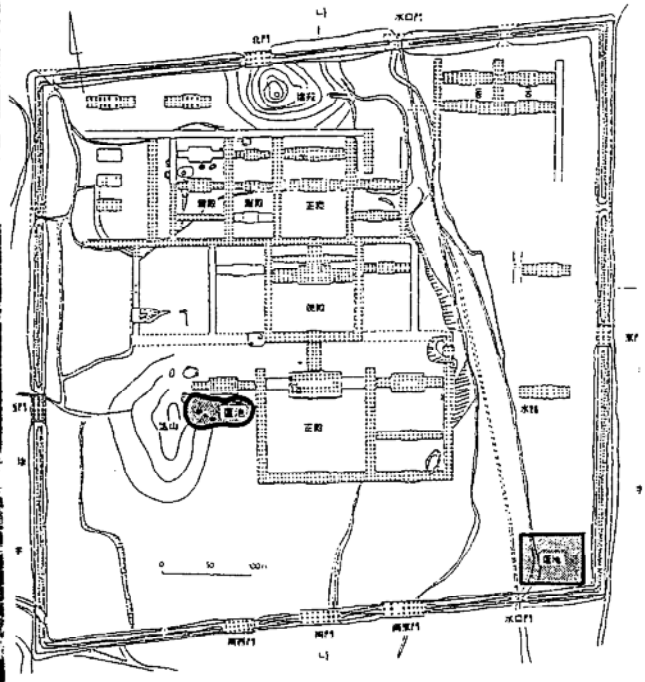
2、雁鴨池の舟入り



3、雁鴨池の石槽

4、雁鴨池の復原

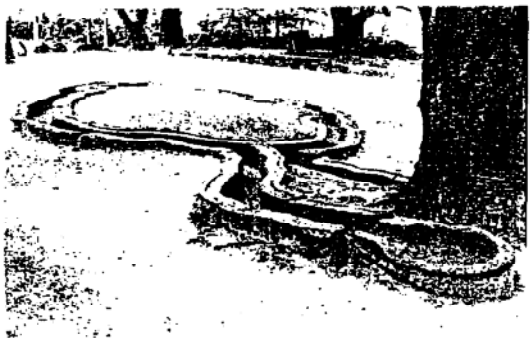
5、復原された雁鴨池



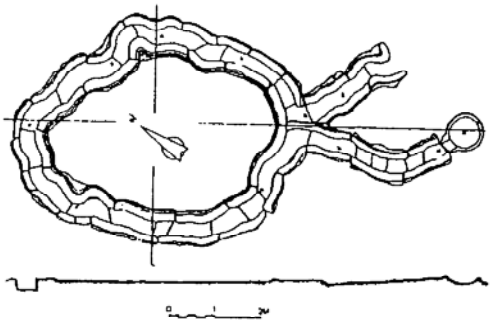
6、高句麗・安鶴宮と蓮池

1、新羅・慶州の龍江洞の苑池跡

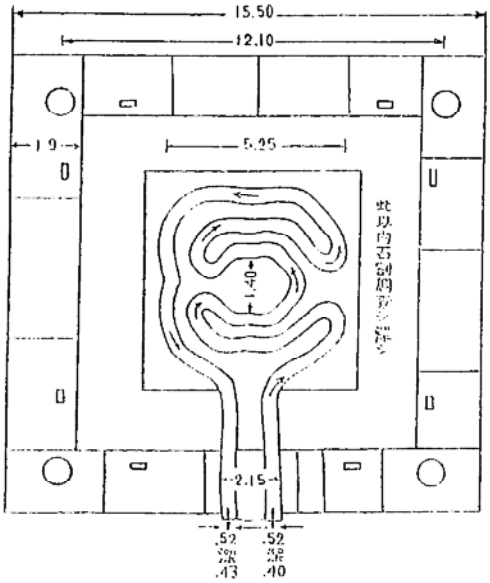
2、新羅の龍江洞苑池跡



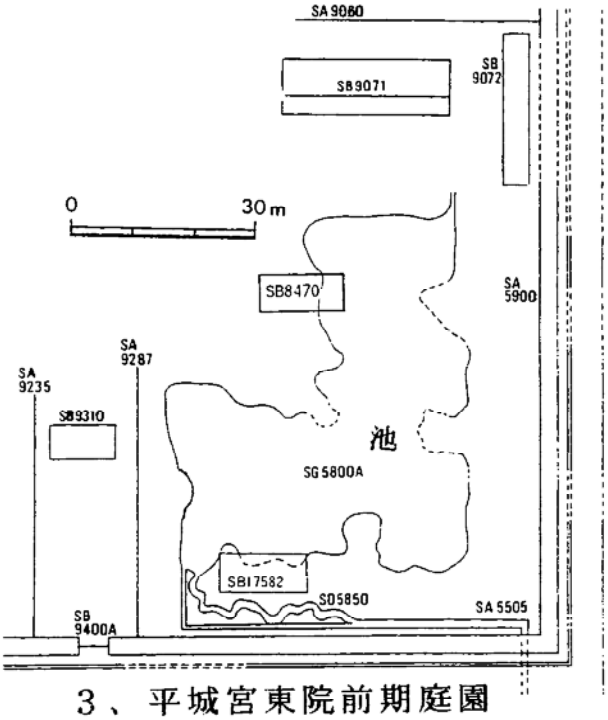
3、新羅・慶州の鮑石亭



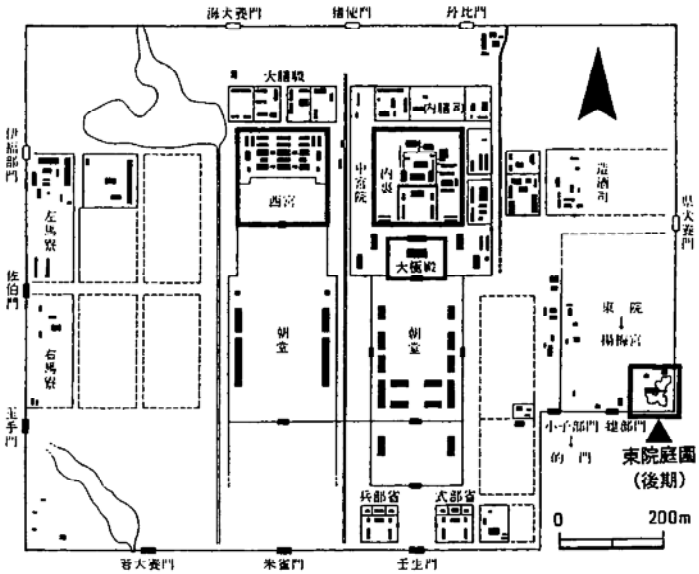
4、鮑石亭の曲水池



5、宋・汴京崇福宮の曲水溝

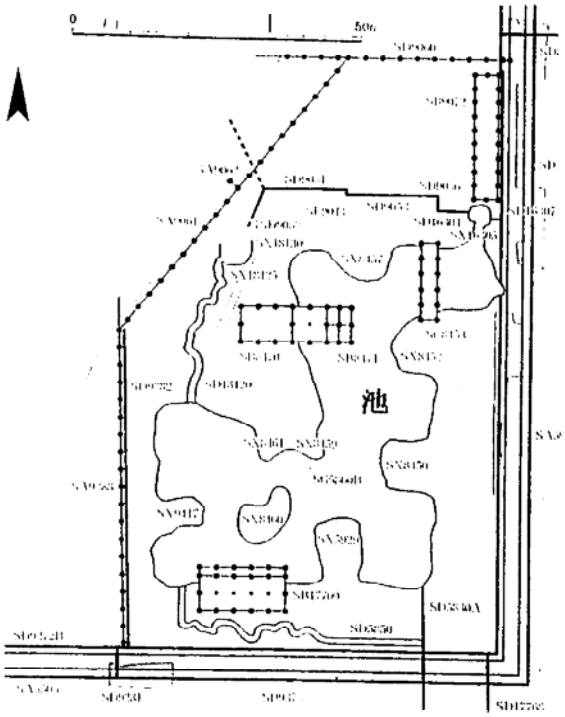


3、平城宮東院前期庭園



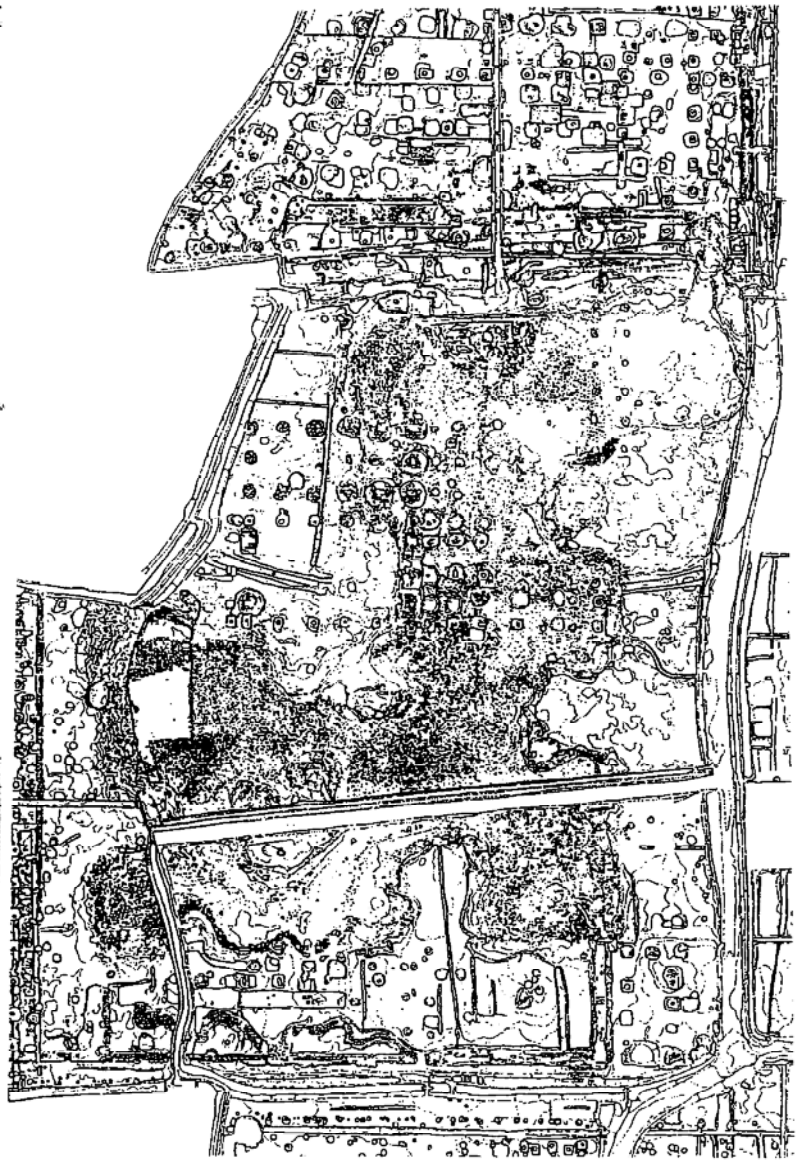
奈良時代後半の平城宮と東院庭園

1、平城宮東院庭園の位置



4、平城宮東院後期庭園

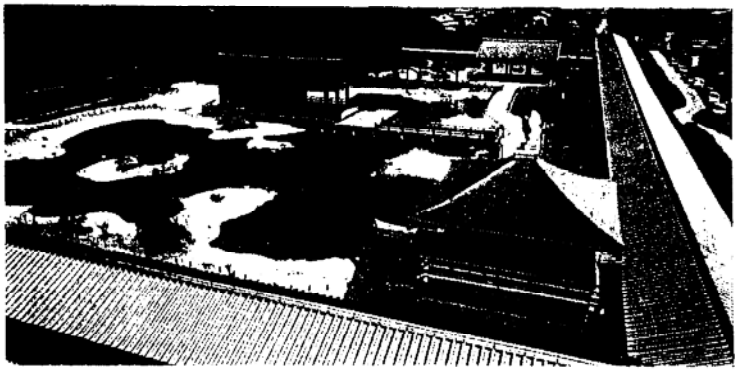
5、東院後期庭園の築山



2、平城宮東院庭園実測図

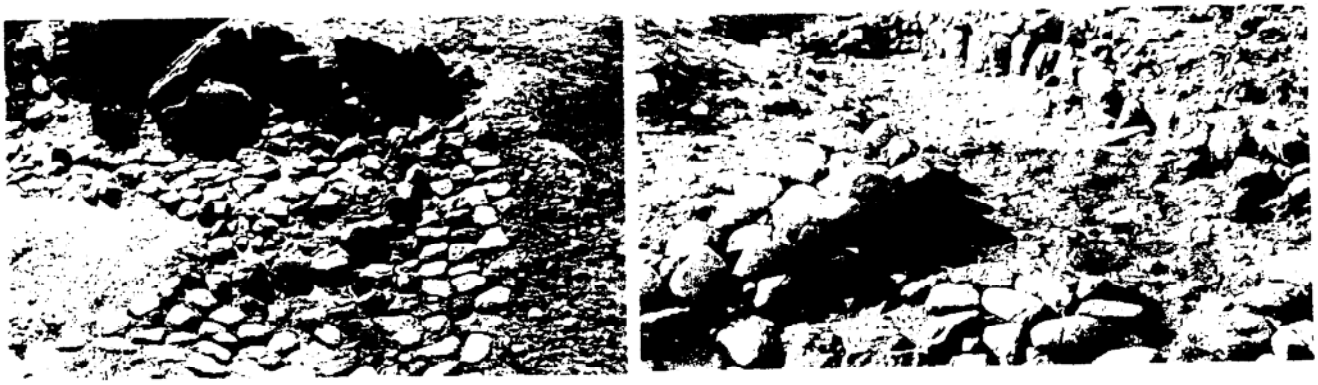
1、平城宮東院庭園全景

2、東院庭園曲水溝



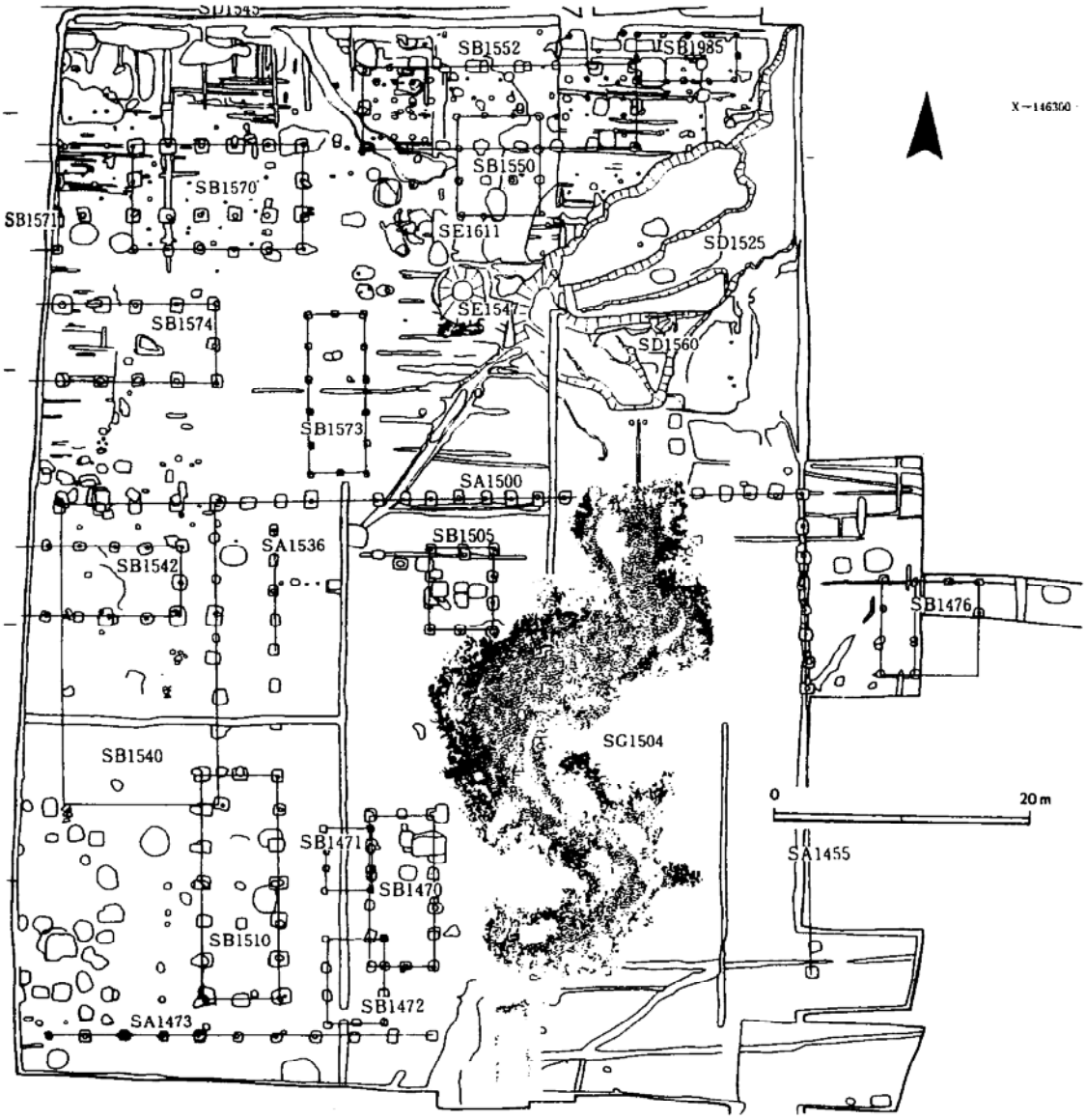
3、復原された東院庭園

4、平城京宮跡庭園全景(北東から)



5、宮跡庭園の石組池の岸辺と底石敷

J



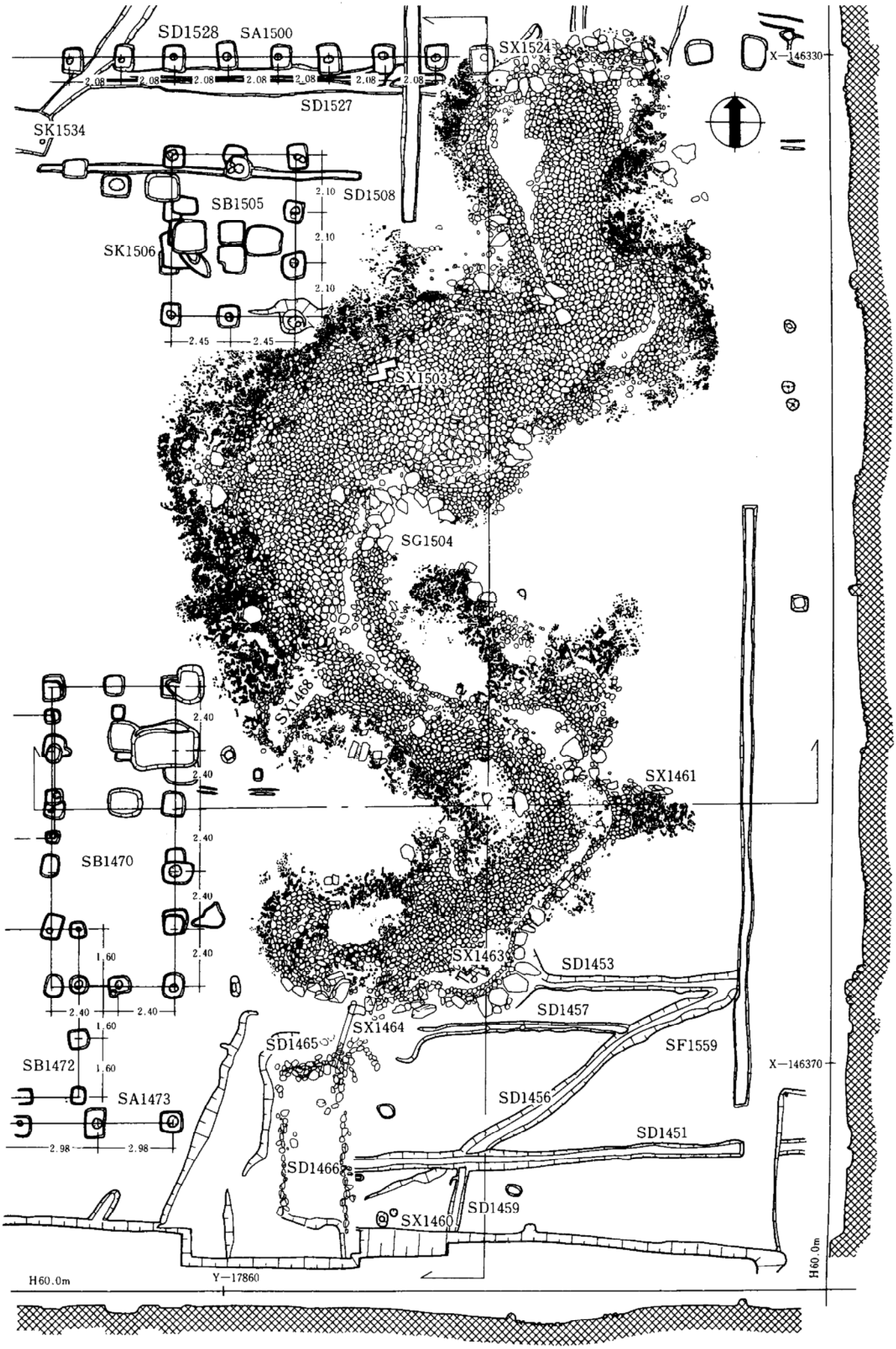
1、宮跡庭園実測図

2、石組池の景石

3、石組池と洲浜

4、石組池の景石と底石敷

5、石組池の景石と洲浜


K
SD1528
SA1500
SX1524
X—146330
SD1527
SK1534
SD1508
SB1505
SK1506
SX1503
SG1504
SX1468
SX1461
SB1470
SX1463
SD1453
SD1457
SX1464
SD1465
SF1559
SB1472
SA1473
SD1456
SD1451
SD1466
SD1459
SX1460
X—146370
H60.0m
Y—17860
H60.0m

6、宮跡庭園実測図

【メ モ】